

# RYUKOKU KIYO

THE RYUKOKU JOURNAL  
OF  
HUMANITIES AND SCIENCES

Vol.43 No.1

November, 2021

## CONTENTS

A Pragmatic Analysis of the Personal Pronouns and Nouns of the  
Pejorative Expressions in the Kamigata Rakugo Stories ..... KADOOKA Ken-ichi ( 1 )

Let's Not Think of Tomorrow:  
Mining Disaster Songs ..... Simon ROSATI ( 17 )

Der Schüler Thomas Bernhard  
—Ein Machtkampf zwischen Schule und Literatur— ..... IMAI Atsushi ( 31 )

El itinerario de un brigadista japonés-estadounidense:  
Jack Shirai y la Guerra Civil española (2)  
—Reflexiones sobre su trayectoria en la batalla del Jarama— ..... YASUDA Keishi ( 43 )

How to construct generalized logistic curves associated with the  
complex logistic equation: An application to COVID-19  
..... ARAI Jun, NISHIGAKI Yasuyuki, ITO Toshikazu ( 55 )

Published by  
Ryukoku University  
Kyoto, Japan

龍  
谷  
紀  
要

第  
四  
三  
卷  
第  
一  
号  
二  
〇  
二  
一  
年  
十  
一  
月

龍  
谷  
大  
学

# 龍谷紀要

第43卷 第1号

2021年11月

上方落語に見られる卑罵語人称代名詞と  
一般名詞の語用論的分析 ..... 角 岡 賢 一 ( 1 )

Let's Not Think of Tomorrow:  
Mining Disaster Songs ..... ロザーティ サイモン ( 17 )

Der Schüler Thomas Bernhard  
—Ein Machtkampf zwischen Schule und Literatur— ..... 今 井 敦 ( 31 )

El itinerario de un brigadista japonés-estadounidense:  
Jack Shirai y la Guerra Civil española (2)  
—Reflexiones sobre su trayectoria en la batalla del Jarama— ..... 安 田 圭 史 ( 43 )

複素ロジスティック方程式から導かれる一般化したロジスティック曲線を  
構築する方法について：COVID-19への応用 ..... 新 井 潤 ( 55 )  
西 垣 泰 幸  
伊 藤 敏 一

龍谷大学

# 上方落語に見られる卑罵語人称代名詞と 一般名詞の語用論的分析

角 岡 賢 一

▶ キーワード

上方落語  
待遇表現  
卑罵語  
代名詞  
一般名詞

## ▼ 要 旨

In this paper, a pragmatic analysis of pejorative locutions will be shown citing the examples from the Kamigata Rakugo stories. Such pejorative locutions cover the syntactic categories of personal pronouns, nouns, main verbs and auxiliary verbs. The focus in this paper will be put on personal pronouns and nouns. The most characteristic finding here is that the degrees of pejorative attitude of personal pronouns can be arranged in one scale, and that most of them are uttered by men. The nouns verified in this paper are those of the substitute of general nouns to add the nuance of pejorative expressions: a general noun *atama* (head) becomes *sukotan* as a pejorative expression.

## 第一節 はじめに

本稿では、上方言葉における待遇表現として卑罵語の人称代名詞と一般名詞を語用論的に分析する。敬語と逆に、相手に対して見下した態度をとる言語表現は「軽蔑語」とも「侮蔑語」とも称されて一定しないことから明らかであるが、これまで研究が進んでいなかったと言えらるほどの領域である。本稿においては竹田晃子氏（2017）も採用している用語を採用して、これを「卑罵語」と称して分類を試みる。題材は上方落とし噺に求める。庶民の娯楽であった落

とし噺には長屋の住人から大店の当主まで登場し、話し言葉が古いまま残っている場合も多い。そして落とし噺に登場する場面というのは敬語が必要な状況と同等以上に、卑罵語が必要不可欠であると言える。それは例えば旦那が丁稚に小言を言う場面であったり、長屋の住人同士が喧嘩をする場面であったりする。落とし噺はこのような状況において話が展開するために、「卑罵語がないと成り立たない」とも言えるのである。一つは共時的な観点として卑罵語がなければ成り立たないと言えるほどの落とし噺における語り口であり、もう一つは江戸時代中期の語彙や言い回しなども残っている通時的側面を捉えてみたいと考えている。落とし噺の題材となっている商家で住み込みの丁稚制度が残っていたのは約百年前のことであり、噺での言葉遣いはそういう時代背景であると捉える必要がある。

角岡 (2017a) は「軽蔑語」という術語の下で卑罵語表現について論じた。軽蔑語という用語は、『言語学大辞典第六巻』用語編から採ったものである。そこでの定義は、「さげすみ、見下し、非難」などの意味合いを有する言語表現を指している。同書には軽蔑語以外の用語として、誹謗語・悪化語・さげすみ語・非難語・軽侮語・蔑称(形)・貶称(形)・侮称・軽卑語・卑属語と実に様々な呼称が挙げられている。これだけ多種類の呼び方がありながら統一されていないのは、この分野で研究が進んでいないことの象徴であろう。理由の一つとして、題材をどのようにして集めるかが困難であることが考えられる。性質上、辞書などに収録されている語彙項目は限られるであろう。更に実例を多数集めるとなると、小説などの会話部分から拾うというように手段が限られそうでもある。その点、本稿では上方落とし噺という素材に限定しているので簡単に題材を集めることができた。

また角岡 (2017a) では「野卑度」という尺度を導入した。これは典型的には、人称代名詞で丁寧な言葉遣いから順番に並べてみると、一直線上に納まるという結果になる。男女差を加味して、二次元化することも可能である。人称代名詞についても、野卑度という尺度を導入することは意味があると考えられる。一人称の自称についても二人称についても、同じ人物が話し相手や状況に応じてこれら人称代名詞を使い分けるという場面は落とし噺に多い。

菊地氏『敬語』では日本語待遇表現に関わる要素として、次の六つが挙げられていた。

(1) 日本語待遇表現に関わる六要素

- ①《上下》    ②《丁寧↔ぞんざい・乱暴》    ③《改まり↔くだけ／粗野／尊大》  
④《上品↔卑俗》    ⑤《好悪》    ⑥《恩恵の授受》

この尺度によると、本稿で採り上げる卑罵語は、①相手を見下す、②ぞんざいで乱暴、③くだけている、粗野、④卑俗、⑤相手に悪感情を起こさせる、⑥負の恩恵とも言うべき、という特徴として纏めることが出来よう。このような特徴は、敬語において相手を持ち上げたり自分を謙る動機とは全く逆方向を指向していると言える。

## 第二節 人称代名詞

この節では、卑罵語としての人称代名詞を扱う。人称代名詞は、誰が誰に対してどのような状況で呼びかけるかという要素において、極めて語用論的側面を持つ。以下に示す実例も、そ

のような事情を反映して多様である。

## 二人称代名詞（対称詞）

まずは、二人称代名詞の類を採り上げる。落とし噺では罵り言葉として登場する場合は、相手を指して罵るのである。率直かつ素朴な印象であるが、以下で論じる卑罵語二人称代名詞は尊敬語二人称代名詞に比べると随分と数が少ない。そしてもっと大きな特徴は、これら二人称代名詞は全てが男性から呼びかける例という点である。つまり、以下で挙げる二人称代名詞は野卑度が高いので、女性は使わないのである。上方噺というのが喜六や清八という長屋の住人が主な登場人物であって、普段の生活で日常会話として繰り広げられるのが題材である。

卑尊度が中程度の例では「おまはん」は「お前」に「はん」が付いている分だけ丁寧であると同時に、他人行儀という響きもある。語感はやや柔らかい。野卑度が高い「お前」辺りまでは日常生活において通常の生活圏内における言語活動と思われるが、野卑度が極大である「われ」、「おのれ」、「おんどれ」はそうとは言えない。これは反社会的勢力とでも言うべき、通常の生活圏を越えた場面での使用例と言える。そういう意味で、取り扱いには注意が必要である。それは取りも直さず、これら呼称が頻出する『らくだ』『堀川』<sup>\*1</sup>というネタの性格にも及ぶことである。そしてそれは、現代の標準的な日本語に対応すべき語彙項目を見出すことが不可能であるということの意味する。

最終節で、尊敬語を含めた待遇表現としての人称代名詞を纏める関係で、尊敬度が高い部類を先に挙げる。通し番号を振っておく。

- (2) ① あんたはん ② あんさん ③ 貴方様 ④ 尊公 ⑤ あなた ⑥ あんた  
⑦ そち ⑧ そなた ⑨ こなた ⑩ こんた ⑪ おまはん ⑫ 其処許  
⑬ 貴殿 ⑭ その方

このうち、「あんた、おまはん」辺りは卑罵語と分類することも可能であるぐらい、尊敬度は低い。しかしながら相手を卑しめ貶めるという意図はなく、ごく身近な間柄で親しみを込めて呼びかけているのである。例えば「あんた」などは、長屋暮らしで妻女が亭主に呼びかけるような場面が典型的であろう。⑦「そち」というのは、店の主が丁稚に呼びかける折などの対称詞であるが、目上であるという意識を話し手が持っているのである。そういう視点から、「そち」は尊大語と分類している。詳細は他稿に譲る。

以下では、卑罵度の強い二人称代名詞を語彙項目別に挙げる。

### ⑮「お前」

歴史的には「御前」の時代は文字通り貴人あるいは目上に対する敬称であったものが、時代が下るに連れて野卑度が増してきた。古い意味での用例を、噺『高尾』の口演筆記で見ておく（先代（三代目）春團治師による）。吉原の高尾太夫は、侍の島田重三郎に操を立てて仙台の伊達綱宗公に斬殺されてしまう。ところが太夫が残した反魂香を焚くと、煙の中に朦朧とその姿が現れる。「お前は島田重三さん……」「そちゃ、女房、高尾でないか」「二世と交わせし反魂

香、徒には焚いてくだしゃんすな」「何の徒に焚くものか、いや、そなたに会いたさ見たさ」「その香の切れ目が、縁の切れ目……」「南無高尾幽霊頓証菩提、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」。太夫からの呼びかけは「お前」であるが、これは古い時代の名残で敬称である。対して島田重三郎から太夫には「そち」、「そなた」と、これも丁寧な呼び方である。

しかし時代が下ると一般的に、目下の者に対する卑罵語的な呼び方になってくる。家庭内では、長屋などで亭主が妻女に対して呼びかけるのに最も多かったであろう。噺『崇徳院』で、熊五郎が主屋から帰ってきて言いつかった用向きを妻女に伝えたところ、妻女は簡単に見つかるものと考えている。熊五郎は「お前はあっさり言うけど、何処の何方か分からん」と返す（『米朝全集』第四巻<sup>\*2</sup>）。主屋の若旦那が見初めた相手について話しているのであるが、妻女に向かってはお前呼ばわりである。他人ではあるが、比較的親しい間柄では噺『口合小町』で、甚兵衛はんが佐助の妻女に話しかける場面がある（『米朝全集』第二巻）。始めでは「佐助はんちゅうたら、おまはんの亭主やで」という話し振りであったのが、途中から「……なんとようしゃべるなあ、お前」というように言葉遣いが変わる。また商家では、当主や番頭など上の立場から目下の者に遣われる。噺『七段目』では、番頭に若旦那の呼び出しを頼んだ当主が、番頭が要領の得ない受け答えをするので、「そういちいち真似ばかりするのやないがな、お前」と窘める（『米朝全集』第六巻）。

#### ⑩「貴様」

「貴様」は、番頭が丁稚を詰る際などに用いている。丁稚を遣いに出して帰りが遅くなった折に「遣い上手とは貴様のこっちゃ、外でのらくらして店に入る時だけばたばたくさって」というように言う。噺『べかこ』は、城中で腰元にべかこ（あかんべえ）をして一騒動を起こした噺家泥丹坊堅丸さんが「そんな、わたいお姫さんにお話しを」「貴様のような奴が、姫の御前に出せると思おるか」と城の侍に悪し様に言われる（『米朝全集』第七巻）。ここでは身分制を反映して、侍階級が平民たる噺家を貴様呼ばわりしたとして時代を映していると言えるであろう。しかし反面、話し手にしても時と場合を選ぶように思われる。それは即ち、『らくだ』や『堀川』に出てくるような反社会的勢力とでも言うべき乱暴者ではなく、侍のように一定の身分を持つ者が発する言葉遣いという点である。

噺『百年目』では、番頭を呼んでくるように言いつけられた丁稚が、「今行くちゅうとけ」と番頭の言をそのまま伝えてしまう（『米朝全集』第六巻）。それを聞いた当主、「そら何を言うのや。うちの番頭どんがそんなものの言いようしゃはるお人か、ええ。（中略）だんだんだんだん生意気になりくさって、ええ。なんじゃ、そのふくれ面は……。米の飯がてっぺんへのぼったとは、貴様のことじゃ」ときつい叱り様である。これは後ろで聞いている番頭に間接的に言うという意図があったからである。

次は若旦那が丁稚を呼ぶ例である。噺『土橋萬歳』冒頭で、丁稚の定吉が番頭に命ぜられて若旦那が外出しないように張り番をしている（『米朝全集』第五巻）。若旦那は定吉に二十銭渡して外出を見逃して貰おうと画策するが、定吉は「あんたわたいの生き肝でも取ろうと思て」と油断がない。若旦那は「貴様らの生き肝が何に効かい」と断ずる。これは軽い調子である。定吉は「あんた」と呼んでいるが、これは許容範囲内なのであろう。同じ噺で、次は番頭が定吉を詰る場面がある。定吉が若旦那の張り番をしていた折、二十銭を受け取って若旦那が外へ



出る手助けをした。その後、張り番は亀吉に交替したので、自分は咎めを受けないという勘定を付けて番頭に「亀吉っとながちょうど居眠りして若旦那を出してしもた時分やと思うわ」と告げたりする。番頭は「貴様あ……ははあ、そうか。いやいや、そうやな、お前は賢いよってに、そんなあほなことはせえへんな」という調子である。始めの「貴様あ」ではかなり怒っていたが、ここは怒鳴りつけても得策ではないと考え直し、「お前」と少し語調も和らげている。

#### ⑰「われ」、⑱「おのれ」、⑲「おんどれ」

ここで扱う三語は、極め付けの野卑度故に専ら男が口にする二人称代名詞であると想定していた。ところが豈図らんや、女性の使用例が見られたのである。それは落とし噺としての滑稽話ではなく、怪談において非業の死を遂げた女の口から発せられるという点において、何重にも特異である。噺『怪談市川堤』は、米朝師の解説にあるように芝居『籠釣瓶』の翻案である（『米朝全集』第二巻）。元は西陣の織物問屋越後屋に生まれた次郎吉であったが、若い頃から放蕩三昧で悪業の限りを尽くす。金に困って金策に出かけたものの、予定の日より数日遅れて帰って来たために出奔した女房のお紺と姫路の東を流れる市川堤で出会う。お紺は落ちぶれ果てて物乞い姿である。施しに与ったお紺、ひょっと見ると恨み連なる次郎吉である。「次郎吉。おのれはなあ、業病に苦しむわしを振り捨てて、ようもむごたらしゅう逃げくさったなあ」と恨む。積年の怨念が籠もっているとは言え、この言葉遣いは尋常ではない。自称の「わし」、二人称の「おのれ」、助動詞の「くさる」、いずれも通常では女の言葉遣いではない。この場面以外では女性発話例として見られない故、例外扱いも相当と考えられるほどである。

他の例は、男の発話で占められている。噺『らくだ』では、らくだの卯之助とその兄貴分で脳天の熊五郎という二人の無法者が登場する（『米朝全集』第七巻）。もっともらくだは噺が始まったときには河豚に当たってこの世の者ではない。この二人は長屋住まいをしているが家賃は払ったためしがない、往時は買い物も節季払いにしていたので現銀がなくとも物は買えたが、節季の払いも貯めたままという無法ぶりで近所の嫌われ者であった。脳天の熊五郎が、らくだの住まいに呼び入れた屑屋を初めとして相手と呼ぶときに「われ、おのれ、おんどれ」を連発する。これ以上悪し様に言い様がないという最大限の野卑度である。「われ、おのれ、おんどれ」はいずれも元来が一人称代名詞である。これが二人称として用いられると野卑度が増すという点も興味深い。『大阪ことば事典』によると「おのれ→おどれ→おんどれ」と変化し、「河内から大和方面でいう」との説明が見られる。場面としては、熊五郎が紙屑屋に家主の家に使いに立ってらくだが死去したことを報せ、酒と煮染めを届けるようにと命じたところ、紙屑屋は「それ、誰が言いまんねん、それ」と質問。「誰がて、われが言うのやないかい」という返答である。その直後は「何を言うとおんねん。お前はそれだけのことを向こう行て言やあええのや」とお前呼ばわりに戻る。「お前」と言う呼称が丁寧に聞こえるほど、「われ」は野卑度が高い。家主は、酒と煮染めを届けることを一度は断る。そうすると熊五郎は死人にカンカン踊りを踊らせるとて、紙屑屋に「われそっち向け」と背中を向けるように命ずる。紙屑屋は「なんぼわたいがそっち向いたかて、向こうがよそを向いてまっさかい、話にならん」と訳の分からない応対、熊五郎は「われがそっちを向けっちゅうねん」と畳み掛ける。

笑福亭鶴志師の口演筆記では、紙屑屋が「そんな、ハバイのない人間やおまへんねやで\*3。お前らとおんなじようにすな、アホンダラ、注げッ。何さらしてけつかんねや、アングラ。最前

からちょっと黙ってりゃええ気になりやがっておのれ。この酒かて、俺が死人のカンカン踊りしたからもらえたと違うんかい。早いこと注ぎさらせッ、おんどれ。注がんか。この徳利と、おのれの頭と……」と逆に熊五郎を罵倒する。鶴志版でも当初は「親方」と遠慮して呼びかけていたのが、酔いに任せて立場を逆転させてしまった。ここで引用しただけに限っても、始めは「おまへんねやで」と丁寧な口調であったのが突然、「お前ら、あほんだら」と乱暴になる。紙屑屋にこのように乱暴な言葉遣いをさせるのは、酔いによって気分が大きくなったという演出を強調する狙いがあるのであろう。

この『らくだ』と並んで、卑罵語の極致とも言える言葉遣いが見られる噺が『堀川』である(林家染丸師の口演筆記)。この名は京の地名とは関係なく、芝居の『近頃河原達引』猿回しの段から取っているのである。火事と喧嘩が三度の飯よりも好きという喧嘩極道の息子が、噺の早々で蕎麦屋相手に「じゃかやっしわい、このガキ、おのれ何かい、わしに唄うたわさんつもりか」と喧嘩を吹っ掛ける。いきなりおのれ呼ばわりである。

もう一例の「われ」を、噺『兵庫船』から挙げる。これは、サゲで「あんたのご商売は」<sup>ごこぼ</sup>「雑喉場のかまぼこ屋や」と名乗る男が、巡礼の娘に魅入れして舟を停めた鱻に向かって呼びかける場面である(『米朝全集』第六卷)。「われか、人間の娘食らうなんて、生意気なことぬかすな」という言葉遣いである。「われ、食らう、ぬかす」という辺りは野卑度が高い。蒲鉾屋という商売柄、「鱻でも鮫でも、わしの手にかかったら、そんなもん、みなすりつぶしてしもたるのや」と下げるのである。

噺『貧乏花見』にも「おのれ」が見られる(『米朝全集』第六卷)。花見で宴席を張った場所から長屋の連中に酒食を持って行かれたので、幫間の一八が文句を付けに行く。長屋の一人は「何ぬかしてけつかんねん、おのれ。尻からげして、向こう鉢巻き締めて、えらい勢いやないかい」と詰る。酒食を持ち去って悪いのは長屋側であるが、ここでは開き直ったのである。

また噺『猫の忠信』でも、常吉が駿河屋次郎に稽古屋に入っていくよう促した時、次郎貴は「そんなことはようせん」と尻込みする(『米朝全集』第六卷)。常吉は「おのれのために、こないな騒動になってんのや」と責める。常吉は堅気の商売であろうが、次郎に対して強く出るために「おのれ」呼ばわりしたのであろう。

このように一般庶民だけが野卑度の高い「われ」、「おのれ」、「おんどれ」と言うだけではなく、お奉行も裁きの場で用いる例がある(『米朝全集』第五卷)。噺『次の御用日』で、何度も何度も天王寺屋藤吉が「あ」という奇声を発した場面を再現するので、奉行が「黙れっ、おのれ現在『あっ』てなことを申しておきながら、相手が十五に足らぬ小兒とあなどり(以下略)」と畳みかける。ここは奉行がお裁きという状況故に、ある程度の品位を保たねばならないであろう。この場合、被告を威圧するためにおのれ呼ばわりになったと考えておく。この後も更に二遍、「おのれ」と呼びつけている。

## 自称詞

一人称の自称は、どの噺にも必ず複数回登場するので数が多い。ここで一人称代名詞を論じるが、一般論として人称代名詞は無限とも言えるほどの変種があるので以下では代表的な実例を分析する。卑罵語とは「主として相手を卑しめ貶める」というように定義することが妥当であろう。しかし一人称代名詞では、自分自身のことを卑しめるという結果になる。「わたくし」

が「わたし」と簡略化されると、丁寧度は一段下がる。これが「わて、わし、わい」となると野卑度が徐々に増していく。本稿では、このように一人称代名詞で野卑度の高い部類も卑罵語として論じる。「わたくし」、「わたし」のように畏まった公の場ではなく、長屋に暮らす庶民が日常生活で交わす会話での一人称代名詞なのである。

二人称代名詞の折と同様に、最終節で尊敬語語彙と合わせて検討するため、敬度の高い部類を挙げておく。

- (3) ① 朕 ② 磨 ③ 余 ④ 身共 ⑤ 輩<sup>やつがれ</sup> ⑥ 某<sup>それがし</sup> ⑦ わたくし ⑧ この方  
⑨ わたし ⑩ わらわ

詳細は角岡（2021）を参照されたい。以下は、これら語彙より敬度が下がる部類に属す。個別の語彙項目と説明を掲げる。

#### ⑪ 「わたい」

男女兼用の部類で「わたい」がある。噺『卯の日詣り』では、住吉神社近くの一見茶屋で仲居が登場する（『米朝全集』第一巻）。当初は「わたいもう、そない言うて帰らしてもらおう」と「わたい」であったのが、次には座敷で「ほな私もここに座らしてもらいますわ」となっている。これは恐らく「わたし」であろう。「わたい」から「わたし」に、幾分丁寧になったようである。この仲居は、お客の隣に座って対応していたものらしい。次は男の使用例で、噺『阿弥陀池』からである（『米朝全集』第一巻）。例によって名前を呼ばれない男、甚兵衛さんと覚しき相手から「お前らな、新聞を読まんさかい世間のことが、なんにもわからんのや」と言われて、「わたいかて新聞ぐらい読んでまっせ」と反論する。

噺『質屋蔵』冒頭で、当主が繻子の帯一本を例に挙げて質屋稼業の因縁を語る（『枝雀全集』第五巻）。出入りの呉服屋から繻子の帯を六円で手に入れたものの、家計の苦しさから三円で質入れした妻女が、ふとしたことから患いつく。看病に来た妹に「なあ、あんたにも、いろいろ世話かけたけれども、今度ばかりは、どうやらわたいもう、あかんように思う」と話しかけるのである。

噺『つる』では、髪結床で甚兵衛さんの噂話を聞き付けた喜六が、当の甚兵衛さんにその噂話を伝えようとしている（『枝雀全集』第五巻）。「それをわたいが、ここであかつと言うてしてもでっせ、ほいであんたムカツとして、あたりに誰もおらんもんやさかい、とりあえずわたいの頭ゴーンといくちゅうような」。

大人の男女だけではなく、子供も「わたい」と自称している。噺『馬の田楽』で、馬の腹の下を潜って遊ぼうという子供連中、一人は「わたい中将でもよろしい。お腹の下くぐるのん怖いわ」と正直である（『米朝全集』第一巻）。『質屋蔵』でも、丁稚の定吉が手っ伝いの熊五郎を連れてくる道中で「わたいも、あの、詳しいことは知らんのですけど」と断っている（『枝雀全集』第五巻）。

#### ⑫ 「わて」、⑬ 「あて」

女性の自称詞は主に「あて、わて」である。「わて」は男女両用であるが、「あて」は女性専



用である。男性に比べて女性は階層差が小さいように思われる。長屋のかみさんであっても船場のご寮さんであっても、同じように「あて、わて」と言いそうである。年代の若い娘連中であれば「うち」であろう。この辺りは社会言語学的にも興味深い。

まずは「わて」の例を噺『軒茶屋』から挙げる（『米朝全集』第一巻）。遊郭の女当主が客のターさんを迎えて、「あんさんだけはなあ、ターさん。わてもたいがい気イ使うてお世話さしてもろうてまっせ」と話すのに対して、客は「さあさあ、そないに言うけど、姐貴」と姐貴呼ばわりである。噺『植木屋娘』では、植木屋幸右衛門の娘お光が近所でも評判の小町娘、幸右衛門はお寺の小姓ではあるが五百石の跡取りである伝吉と娶そうとする（『米朝全集』第一巻）。お光は何不自由なく育てられた身である。母親から「あんた、何か隠してることがあるやろ」と詰問されて、「わて、何も」と言葉少なく答える。実はこの時、お光は伝吉の子を宿していたのであった。人物描写として、お光は恥ずかしがり屋で無口に描かれている。

男の使用例では噺『愛宕山』から、幫間の一八が言う（『米朝全集』第一巻）。愛宕山にこれから登ると指さした旦那に、一八が「わて、あんまり低いさかいびっくりしたん。こんなもんぐらいなんでんねん」と強がる。

女性自称詞「あて」の例を噺『立ち切れ線香』から引く（『米朝全集』第五巻）。恋煩いで寝付いた芸妓の小糸が、思い人であった若旦那に詠えてもろうた比翼の紋入りの三味線が届いたので、実の母親に「お母ちゃん、この三味線、あて弾きたい」と願う。「あて」というのは、庶民的な語感を伴う。

#### ⑭「わし」

男性専用と思われた自称詞「わし」であるが、これは話し手が実に多様である。女性自称の例も見られた。男性自称詞としては、ある意味で話し手の身分などは「わたくし、わたし」と重なる部分も大きいと言える。お裁きなど公の場面では自称詞「わし」は不可能であるが、日常生活では広い範囲で用いられる。二十代までの若い連中が「わし」と自称するのは不自然で、そこそこの年配である男性という印象が強い。実例を通して、どのような話し手像を捉えることができるのか探ってみよう。但し、実例は余りに多いので以下に挙げるのはごく一部である。

噺『卯の日詣り』では、髪結いの磯七と旦那二人ながらに「わし」と称している（『米朝全集』第一巻）。住吉神社参詣の帰りにお茶屋に立ち寄り、「なんじゃい、なんじゃい、今日はまた女子はんが皆わしのねきか」と旦那は悦に入る。磯七は酒を注がれる折に「ぎょうさんついで、ぎょうさん……わしの顔でわしが飲むのやがな」。兩人とも自称は「わし」である。

噺『饅頭こわい』では、怖い物知らずと周囲から奉られている年配の「おやっさん」が登場する（『枝雀全集』第三巻）。生涯にたった一遍だけ怖い思いをしたという回顧談で「あれはわしがまだ二十歳になるかならずの頃じゃった」と語り始めるのであるが、それは既に四、五十年前であるという。ということは、この老人は少なくとも六十歳代という勘定になる。

噺『猫の忠信』は稽古屋で義太夫節を習う素人連中が温習会を開くことになって起こる騒動を題材にしている（『枝雀全集』第四巻）。会では『義経千本桜』を通し狂言で演ずるといふ。弟子中の連名頭である六さんが路上で、弟子仲間の駿河屋次郎と出会い、温習会があると耳にして出番を巡って「『四の切り』やって、『渡海屋』とられて、お前、『鮎屋』やる、なるっちゅうと、わしはどこやんねん」と憤る。弟子連中でも古株であるから、それ相応の年齢であろう。

絵師は身分として侍に準ずると考えられたものか、話し振りも侍言葉に近い。しかし流石に「身共」と自称するのは憚られたようで、噺『抜け雀』での絵師は「わし」と称している。噺の冒頭で、この絵師は年の頃なら三十を出たか出んかというように描写されている。「わし」と自称する人物像としては、若い部類であろう。

女性自称としての「わし」が見られるのが、噺『堀川』である（林家染丸師の口演筆記）。喧嘩極道息子の母親で、「火事」を「くわじ」と発音するほど古風に描かれている。寝起きの悪い息子を起こそうとして、坐摩神社の前で心中があったと独り言を言う。それを小耳に挟んで跳び起きた極道息子、神社に行ったがそのような心中はなかったと怒って帰ってくる。「あらなあ、わしが十六の年のこっちゃねん」という母親の言い訳である。

次は芝居の場面であるが、噺『七段目』は『忠臣蔵』祇園一力茶屋の場면을若旦那と丁稚定吉の二人で再現しようとする（『米朝全集』第六巻）。定吉がお軽に扮して、「兄さん、わしゃ恥ずかしいわいな」と切り出す。芝居の場面故に、女性自称詞「わし」にも違和感はない。兄の平右衛門が「何よりめでたい話じゃが、してどなた様に請け出されるな」と身請けの身元を尋ねる。「お前も知っての、大星由良之助様じゃわいな」「なにつ、…(中略)…われを勘平の女房と知ってのことか」と、二人称代名詞「お前、われ」の貴重な例が続く。芝居での言葉遣いは、古い用法を残しているのである。「お前」は卑罵語として野卑度が上がる以前の用法で、聞き手を目上として遇していたのである。

#### ⑮「わい」

最も頻出するのが「わい」である。これは男性用の自称で、比較的若い年代かつ職人階層を中心として用いられる。おっちょこちょいという語感を持つ。語源を辿ると「わし」の約訛とある（『大阪ことば事典』）。「わし」は、落とし噺中では比較的年配の男性が用いるという印象がある。大店の旦那であっても、公の場でなければ用いるであろう自称である。「俺」も頻繁に登場するが、頻度としては「わい」より少ないような印象がある。野卑度は、この両者でほぼ同様であると仮定しておく。

噺『浮世床』のサゲで、「お前がそんな夢見るもんやさかい、床屋の親父、お前の話に聞き入ってしもて、わいの眉毛、片一方剃り落としてしまよかった」とある（『米朝全集』第一巻）。夢とは、吉松が居眠り中に見た色事絡みのもので、吉松は途中で起こされたのである。

続いて噺『卯の日詣り』から例を採る。髪結いの磯七が旦那のお供で住吉さんに参詣するのであるが、帰りにお茶屋に寄ってちょっとした散財をしようとする（『米朝全集』第一巻）。そこで「おい、わいにもついでんかいな」と酒を催促する。

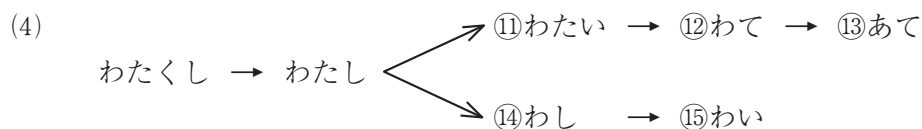
噺『三十石』では、伏見の浜から下り船に乗ろうとする喜六と清八があれこれと話している（『枝雀全集』第五巻）。船宿で待っている間に、土産物売りが来て「おみやどうぞ、おちりにあんぽんたん、西の洞院紙はどうぞす」と呼ばわっている。京のお土産にちり紙（西の洞院紙）、かき餅に砂糖をまぶしたお菓子を売って廻っているのである。その「あんぽんたん」を喜六が「あいつ、わいの顔見て『あんぽんたん、あんぽんたん』言うねん。なんで知っとなねやろな」と憤っている。「あんぽんたん」を阿呆の謂と思い込んだのである。

噺『壺算』では、頼りない男に付いて水壺を買いに来た徳さんが道具屋で「とんとんとーんと運ばれたら、『安い。買うた』っちゃ気にさすだけがえらいとこやわい。今日ンところは、わ

いの顔を立ててんか」と値切る場面がある（同書）。この徳さんは、買い物上手と評判なだけあって、値引きの交渉に長けている。

### 「わたくし」系統の変化

ここで、「わたくし」系統の音声・音韻変化を辿っておく。男女共に、改まった場面では「わたし」という。それよりも形式張ると「わたくし」となる。以上の自称一人称代名詞を上品な順から並べてみると、男性「わたくし-わたし-わたい-わて-わし-わい・俺」・女性「わらわ-わたくし-わたし-わて-あて-うち」という結果であった。「わたくし-わたし-わて」という三つまでが、両性で共通している。「わたし」から「わい」に至る過程は、音声的・音韻的变化で説明が可能である。まずは「わたし」の三音節目で子音/s/が脱落して「わたい」になる経路と、二音節目全体が脱落して「わし」になると二通り考えられそうである。「わたい」の二重母音が単音化して「わて」となったのであろう。「わて」の第一音節目子音/w/が脱落すると女性形「あて」になる。「わし」の二音節目に更に子音/s/の脱落があって「わい」になり、これ以上の変化はない。これら変化を図示すると、次のようになるであろう。「わたくし、わたし」に続けて通し番号を振る。



「わて」は男性も使用可能であるが、「あて」は不可能そうである。これら過程は第二節で見たように、子音が脱落したり二重母音が単母音化するなど発音が簡略な方に変化することによって野卑度が増すという仮説を如実に裏付けしていると言える。堀井氏『京都語を学ぶ人のために』では、第六章第二節に「ワタクシの意味変化」として、この自称詞を詳細に論じている。それによると「ワタクシ」は女房詞であり、「オオヤケ」と対置される名詞であったという。名詞として「御わたくし」という用例も見えるという。「ワタクシ」の変化形として「アタイ」が挙げられているが、噺では聴かれない語形である。「アタイ」が更に「アテ」になったのは、母音融合の結果である。「ワタイはワタクシより少し下品で、江戸時代は花街の女性が用いた」という説明があるが、「ワタイ」となるとかなり品が落ちる。「少し」という程度では済まないような落差があるように思われる。

ここからはこれ以外の自称詞を見ていく。

### ⑯「うち」

女性専用で、庶民的な自称詞として「うち」がある。「自宅、当家」を指す「うち」とは別物である。「自宅、当家」の意味では例は多い。例えば噺『愛宕山』で、お重を広げる段で幫間の一八が「は仕出し屋へあつらえなはったか、あんたとどここしらえなはったか」と尋ねる。お茶屋の女将、「まあ、うちの旦那さん、わかってるやろ。あれやこれや言うて好き嫌いの多いお人どっさかいな、わてとどこでみんなこしらえたんやわ」と答える。ここでの「うちの旦那さん」とは、「当家がご最良に与る旦那さん」というほどの意であろう。

田辺聖子氏『大阪弁おもしろ草子』には、テニヲハの省略例として「うち、行くわ」と紹介されている(104頁)。現代の標準的な日本語であれば、「わたしが行くわ」という程度にしか言い換えられないであろう。しかし「うち」は「わたし」に比べると、遙かに形式張らない自称である。「うち」は、女性自称詞に限定される。

### ⑰「俺、うら」

最も野卑度が高い部類の男性自称詞が「俺、わい」という辺りであろう。使用頻度としては、「わい」の方が高い。「わい」の方がいかにも大坂噺という印象を与えるという側面もあるが、実態としても「俺」より多い。

噺『浮世床』に、髪結床で将棋を指している場面がある(『米朝全集』第一卷)。一人が相手に持ち駒を尋ねると、金銀桂馬に王将という答えである。「ええもん持ってるなあ。王があるだけが、つらいなあ。俺は……ちょっと待て、おい。ちょっとおかしいで」と訝り出す。直前に王手飛車取りが掛かった際、飛車を逃げて王将を取られたのであった。「へぼ将棋 王より飛車を可愛がり」を地で行くような迷勝負である。対する相手は、「おい、そない言うたら、お前の王さんもあらへんやないかい」という質問に「わしのはもう、取られんように初めから懐に入れたある」。

些か芝居がかった調子での例は噺『猫の忠信』にある(『米朝全集』第六卷)。「どうも魔性の者が自分に化けて稽古屋のお静さんを誑かしているようだ」と怪しんだ常吉が、稽古屋の前で様子を窺うと、自分にそっくりな男が中に居る。「ははあ、着物の縞柄、持ちもんまでよう似せたなあ。こうなると俺があいつか、あいつが俺か……」。とど、中に居たのは猫が化けていたのであった。

方言を扱う特殊例で、女性が「おら」と称することがある。噺『江戸荒物』(『米朝全集』第一卷)で、男が—例によって名前が呼ばれていないので不明である—俄仕込みの怪しげな江戸前を操って「江戸荒物」を売りにして荒物屋を開業したものの、まともに商いが出来ない。そこへ入ってきた女子衆が「うらあぬう、横町の長谷川から来よりまいたんじゃがぬう。うち方さーに、なーひろはあーの、つんづべなーの、おざーちゅうで、おざーちゅみゃーでぬう」とまくし立てる。これは特殊な方言で、故意に実在の方言からは外してある。「ぬう」という終助詞が特徴的であるが、これも実在の方言ではない。「なーひろはーのつんづべなー」というのは「七尋半の釣瓶縄」なのである。「おざーちゅうで、おざーちゅみゃーで」は「ございますか、ございまへんか」というほどであろう。これは笑いを増幅するために故意に奇妙なお国訛りに仕立てたものであって、船場言葉を中心として分析を進めるといふ本稿の方針からは外れる。「おら」という形ならば、男女兼用で大坂近郊ならば実際にも使われていたであろう。しかし「うら」は極端すぎるので、以下の分析では参考程度に留める。

## 第三節 一般名詞

本節では、人称代名詞以外の一般名詞を扱う。相手を面罵する場面で代表的とも言える語彙「あほ、ぼけ」の類は、角岡(2017a)第四節で列挙しているので、ここでは割愛する。



## 身体の部位

普通名詞の類は、意味範疇が多岐に及ぶ。人物を指すのも、人物以外の事物で人に言及するのも全て名詞である。まずは身近なところで、体の部位に関する表現を列挙する。

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| (5) すこたん 『近江八景』     | ほべた 『宿屋町』・ほげた 『らくだ』 |
| 口豪輩 (口ごわい) 『植木屋娘』   | 尻癖 『植木屋娘』           |
| おいど (をいらわれる) 『祝い熨斗』 | 我慢 (入れ墨) 『質屋蔵』      |
| でぼちん 『池田の猪買い』       | 鼻提灯、蠟 『天狗裁き』        |

これらのうち、純粹に体の部位を指すのは「すこたん」、「でぼちん」、「ほべた・ほげた」、「おいど」である。それぞれ頭・額・口・尻の意である。『大阪ことば事典』では「すこたん」を「すこうべ→すこう→すこ、となって無意味な接尾辞「たん」を付けた」と説明している。そうすると「すこたん」は語源的に接頭辞と接尾辞の両方を備えていると言える。噺『近江八景』で、易者が前に並んでいる男を捉まえて「そこの男、ちょっとお前、そのど頭<sup>たま</sup>をこっちィ持ってこい。そのすこたんをちょっとこっちへ出せ」と乱暴に命ずる(『米朝全集』第二卷)。「どたま」は接頭辞の「ど」を「あたま」に加える。これをまた「すこたん」と言い換えている。

『大阪ことば事典』では「でぼちん」の語源を「出額<sup>でびたい</sup>」に求め、「「でぼ」に無意味接尾辞の「ちん」が付いた」としている。無意味な接尾辞と括っているが、「たん、ちん」には音声・音韻的にもなにか共通点が浮かび上がりそうである。これも今後の研究課題としておく。『伊勢参宮神之賑』はお伊勢詣りに行って帰ってくるまで一連の旅ネタであるが、『煮売り屋』で「洒落言葉」と称して、身体部位をひっくり返して言う一種の言葉遊びをしている場面がある(筑摩書房版米朝全集第二集)。そこでは「でぼちん」をひっくり返して言う「ちんでぼ」となっている。音韻的に「でぼ+ちん」と二拍で一纏まりと捉えていることが窺える。逆さ言葉では「胸」が「ねむ」、「腹」は「らは」であるが、「頭」は「たまあ」だと言う(同書)。「あ+たま」と分節しているようである。

「ほげた」は漢字では「頬桁」であり、元来は頬骨の意であった(『大阪ことば事典』)。転じて物の言い様を指すようになった。「ほげたをたたく」という連語は、話すの意である。「おいど」は「シリまたはオシリより上品な語とされている」(同書)。厳密に考えると「おいど」は卑罵語ではなく、美称語と分類すべき可能性もあろう。「おいどをいらわれる」と成句になると「誰かに唆される」という意味である。体の一部としての「我慢」は「入れ墨」の隠語である。噺『質屋蔵』では、喧嘩に強い手っ伝いの熊五郎は体中に我慢を入れている、「右が昇り龍で左が降り龍、背中が九紋龍、、、」と描写されている(『米朝全集』第六卷)。「口豪輩」は当て字で、「口ごわい」の意であろうという(『上方落語メモ』)。『大阪ことば事典』には「口ごおわい(口強い)」として見出しに挙がっており「理屈っぽく言いつのる。また、口やかましい」と語釈がある。「尻癖」は異性関係の暗示である。「尻癖が悪い」というような連語形式になる。「鼻提灯」は居眠りをしている亭主が鼻から風船を膨らませている様子、「蠟」はそれが液体となって漏れてくる譬喩である。噺『天狗裁き』冒頭で、喜六の女房おさきさんが喜六が昼寝しているのを傍で眺めている場面がある(『米朝全集』第五卷)。「大きな提灯、あーっ、提灯が破れて

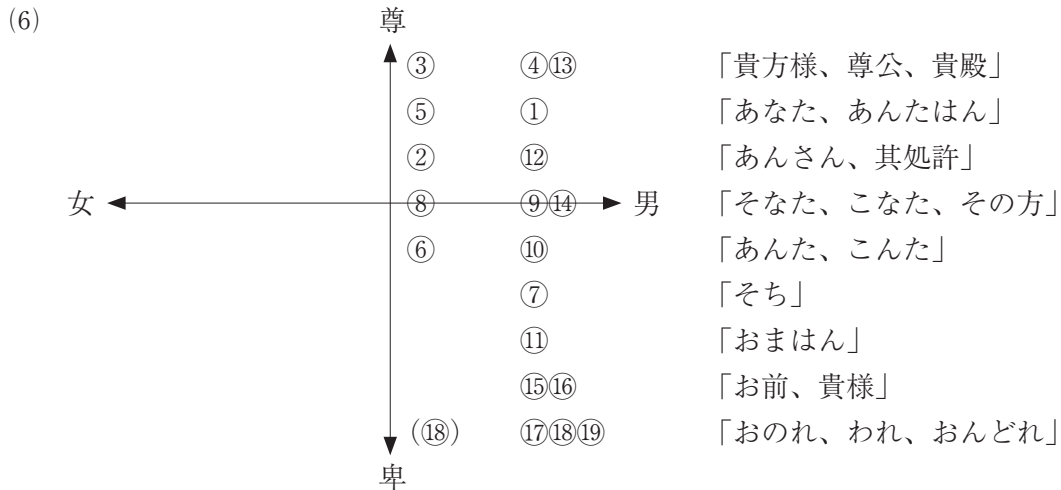
中から蠟が流れてきたがな」と提灯と蠟の喩えである。

本節の内容を総括すると、身体部位の言い換えは接頭辞や接尾辞が付加された部類が多いと言えそうである。また部位としては顔と頭が多い。身体の中でも自然と目に付く部位であるから、当然の傾向と言えよう。

#### 第四節 纏め

本節は、ここまで論じた語彙項目を総括し、人称代名詞を中心にして議論を進める。

まずは、卑尊度と男女差を合成して二人称代名詞を二次元で分析してみる。尊敬語と卑罵語の二人称代名詞を抽出し、以下のように合成した。男女両用の語彙は、中間に配した。語彙項目を、女性語－男女共用－男性語の順に番号付きで示す。

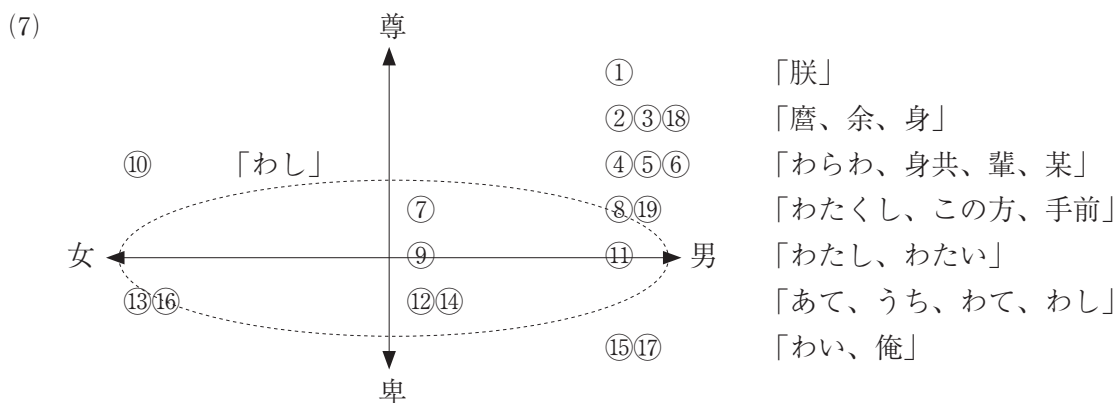


まず気が付くのは、男性が呼びかける例が圧倒的に多様であるという点である。「尊公、其処許」というように丁寧度が高い部類から、逆の「われ、おのれ、おんどれ」まで実に多種類に及び、卑尊度も綺麗に並んでいる。上位に分類し、敬度が高いと想定した「貴方様、あなた」という敬称は、専ら女性語と想定していた。ところが共に、男が発した例が見られたので男女兼用と分類した。「あなた、あなた、あなた」と揃えば、コ系ソ系ア系全てが比較の対象になる。古風な「あなた、あなた」に比べると「あなた」は、現代的で他人行儀という語感が強い。それに比べて女性が使う呼称は、男女兼用の部類を含めて六つしかない。このうち女性が「おのれ」と称したのは『怪談市川堤』の一例だけで、極めて例外的な状況であった。これを除けば、残りの五語は「貴方様、あなた、あんさん、あなた、あなた」という順番で並ぶ。男性の使用例における卑尊度は連続して並んでいるのに対して、女性語としては「あなた」から一気に「おのれ」まで離れているということを見ても、この一例が如何に例外的であるかという示唆になるであろう。そこでこの「おのれ」を男女兼用と分類したのは括弧付きとし、本来あるべき男性語専用という位置には括弧なしで再掲しておく。ここで見る男女差は顕著である。実質的に、女性は「あなた」以下の卑尊度と考えられる呼称は使えない（使わない）のである。卑尊度が中立と分類したのが三語「あなた、あなた、あなた」で、それより上に位置する尊敬

語相当が七語、下に位置する卑罵語相当が九語という分布になった。男女差を考慮に入れると、左上から右下にかけて語彙項目が密集しているような印象を受ける。つまり、女性の卑罵語二人称代名詞は少ないという結論が得られる。

「そなた、こなた、その方、あんた、こんた、そち、おまはん」を実際に卑尊度で並べてみると、これらは中立より下に位置する部類である。ここで二人称代名詞全体として眺めると、尊敬語としてよりも卑罵語に分類される語彙が多いという結果になったのである。

次に、一人称代名詞を同じように図示してみる。二人称代名詞と同様に、右に語彙項目を並べる。番号の追加として、⑬「身」と⑭「手前（ども）」を補う。



この図によると、自称詞は二人称代名詞の分布とは、かなり様相を異にしている。最大の相違点と考えられるのが、女性の卑罵語自称詞として「あて、うち」と挙げている点である。上掲(6)では、女性語としての二人称代名詞で「あんた」から「おのれ」まで卑尊度にして三段階の空白があった。先に述べたようにこの「おのれ」を例外と見做せば、女性語としての二人称代名詞は「あんた」が野卑度の極致ということになる。自称詞、つまり一人称代名詞においても「わし」の扱いに同様の注意が必要である。女性が自称詞で「わし」と称したのは、『怪談市川堤』と『七段目』でお軽が芝居口調で語る場面、『堀川』での老母が語る例のみで、例外に近い。そもそも「わし」は、男性自称詞としても話し手が多様である。侍も絵師も大店の当主も、皆「わし」という自称であった。その上に男女兼用であるとなると、複雑な様相を呈する。仮に上図で、自称詞「わし」が該当すると考えられる範囲を破線の楕円で示してみよう。雑駁ではあるが、中立の卑尊度から上下に及び、男女兼用であることを示している。このような範囲の広さは、例えば「朕」とは好対照である。日本国においては、一時代に一人しか在位がない存在における自称詞は、図では文字通り一点でしか描くことは出来ない。楕円で示した広がりとは対照的である。

## 注

- \* 1 以下、「口演筆記」と註記があるのは、次を参照している。  
 上方落語メモ <http://kamigata.fan.coocan.jp/kamigata/index1.htm>  
 ここでは、噺家の口演を文字化してある。
- \* 2 この表記は以後、創元社版米朝全集を指すものとする。

- \* 3 「はばい」としては、『日本国語大辞典』にも『大阪ことば事典』にも見出しはない。『米朝全集』第七巻『ふたなり』に、「羽生えもない（幅はばいもない、威勢もないの意）」という補註が見られる。

## 参考文献

- 桂枝雀（1995, 1996）『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻、東京：筑摩書房。
- 桂米朝（2002, 2003）『上方落語 桂米朝コレクション』全八集。東京：筑摩書房。
- 桂米朝（編、2007）『四世桂米團治寄席随筆』東京：岩波書店。
- 桂米朝（2013, 2014）『米朝落語全集』全八巻、増補改訂版。大阪：創元社。
- 角岡賢一（2017a）「上方落語に見られる軽蔑語の実例」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第26巻。pp.95-114。
- 角岡賢一（2017b）「上方落語に残るお茶屋文化」『京都産業学研究』第十五号。pp.125-142。
- 角岡賢一（2020a）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉、他（編）所収。
- 角岡賢一（2020b）「上方落語に見られる謙讓語表現の語用論分析」『龍谷紀要』第四十二巻第一号、pp.19-34。
- 角岡賢一（2021）「上方落語に見られる尊敬語補助動詞の語用論分析」『龍谷紀要』第四十二巻第二号、pp.1-16。
- 角岡賢一（2021b）「上方落語に見られる尊敬語名詞類の語用論分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第30巻。pp.1-26。
- 菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。
- 真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。
- 高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇B。
- 東大落語会（編、1994）『増補 落語事典』改訂版。東京：青蛙房。
- 竹田晃子（2017）「卑罵語と敬語の発達」井上（2017）所収。
- 堀井令以知（2006）『京都語を学ぶ人のために』京都：世界思想社。
- 前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。
- 牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。
- 米倉よう子、山本修、浅井良策（編、2020）『ことばから心へ 認知の深淵』東京：開拓社。





# Let's Not Think of Tomorrow:

## Mining Disaster Songs

Simon Rosati

▶ キーワード

Folk song

Mining disasters

*The Blantyre Explosion*

▼ Abstract

This article considers mining disaster songs in English, both from Britain and North America. It suggests that the reasons the songs were composed are not the reasons that people have listened to them later. The songs were composed to commemorate the disaster, mainly for the immediately affected community, and sometimes to raise money. Aesthetic considerations were relatively unimportant, although known folk song tropes were widely used. Later listeners have been interested in the songs as art, though that includes empathy with the victims and survivors. There is closer consideration of the alterations in one song, *The Blantyre Explosion* (Laws Q35, Roud 1014), that have enabled it to survive until now.

*On the day of the explosion  
Shadows pointed towards the pithead:  
In the sun the slagheap slept.  
The Explosion, Philip Larkin*

There was long a tendency for folk song researchers to assume that folk song was rural. Occupational songs were certainly collected in large numbers, concerning soldiers, sailors, shepherds, highwaymen and the like, but there was little interest in urban, industrial song. Yet if we turn to coal mining songs, we find a rich body of material dating back at least 200 years.

The oldest coal mining songs we have date to the late eighteenth century or earlier: Ritson published *The Colliers' Rant* (Roud 1366<sup>1</sup>) in 1793 (Ritson 1973, pp 88-89 of *The Northumberland Garland*). The songs are in a wide variety of tones and cover a wide variety of topics, including work, money and poverty, strikes, play, love, sex, and drink. For print examples one may look at Korson 1938 and 1943, Lloyd 1952 and 1978, and Colls 1977 among others. Collections of recordings include *Songs And Ballads Of The Anthracite Miners* (Rounder 1997), *Songs And Ballads Of The Bituminous Miners* (Rounder 2002), for the USA and *The Iron Muse* (Topic 1993) for the UK. This article will focus on a small proportion of mining songs, those concerning coal mining disasters, sung in English and thus largely from Britain and the USA.

## **A Brief Description of Mining Disaster Songs**

The primary purpose of mining disaster songs was to commemorate the victims of the disaster, draw attention to the horror of it, and, possibly, to raise money for the widows and orphans. So an immediate requirement was a correct description of what happened, when, the death toll and who was involved. Thus *The Avondale Mine Disaster* (Laws G6<sup>2</sup>, Roud 698) occurred:

On the sixth day of September  
Eighteen sixty-nine (Korson 1938: 189)

*The Gresford Disaster* (Roud 3089 in Lloyd 1978: 191-192, and Grigson 1975: 347-348):

It occurred in the month of September  
At three in the morning

---

1) Roud numbers refer to the Roud song indexes, available at the Vaughan Williams Memorial Library website.

2) Laws numbers refer to the classification in Laws 1957 and 1964.

or *The Starlaw Disaster* (Roud 19812):

It was 18 and 70, Aprile the ninth day (Henderson 1992: 119)

It was also important to give the correct number of dead. In *The Blantyre Explosion* (Laws Q35, Roud 1014, in Lloyd 1978: 181):

Two hundred and ten in cold death did lie low

In *The Avondale Mine Disaster* we learn first:

Sixty-seven was the number  
That in a heap were found

And then the final toll:

A hundred and ten of brave strong men  
Were smothered underground

Often people are named: Tomlinson predicted *The Gresford Disaster*; John Murphy worked at the Blantyre pit; Welsby and Whittingham led the rescue attempt at *The Hamstead Mine Disaster* (Raven 1977: 68-69); so did two Welshmen at Avondale – they are named as Jones and Williams in another song about the same event, *The Avondale Disaster* (Laws G7, Roud 3250, in Korson 1938: 192); Mrs. Burnett lost her three sons Joseph, George and James in *The Trimdon Grange Explosion* (Roud 3189, in Lloyd 1973: 183); the actions of John Steel (in fact James Steel) saved many lives at Starlaw, but not those of William Ralston, William Rushford, David Muir, Patrick and Peter M'Comiskie and Swanson.

Events are described in some detail. The two Welshmen went down the Avondale pit to attempt a rescue, and then:

When at the bottom they arrived and sought to make their way,  
One of them died for want of air, while the other in great dismay,  
He gave a sign to hoist him up, to tell the dreadful tale,  
That all were lost forever in the mines of Avondale.

In *The Starlaw Disaster* we hear:

For about twelve o'clock on the same fatal day,  
'The pit-shaft's on fire!', the roadsman did say.



And quick through the workins the alarum he gave,  
All praying to their maker their sweet lives to save.

The detail can be rather gruesome:

All mangled and disfigured  
And the hair burnt off their heads  
Likewise the clothes from off their backs  
And the flesh hung down in shreds. (*The Mines Of Locust Dale*, in Korson 1938: 195)

As well as explosion and gas, as we have seen, miners died from flooding (*The Diamond Flood* in Korson 1943: 272), cave-in (*Story Of Mine Cave-In Shirley And Smith* (Roud 6656), in White (Ed.) 1957: IV: 356) or equipment failure (*Charley Hill's Old Slope* (Roud 3251), in Korson 1938: 196).

Mining disasters unfold quite slowly for the people on the outside, and we hear about those gathered at the pithead:

Crowds soon thronged to the scene of the disaster,  
As the storm-winds blew and the rain came faster,  
Clad in their shawls, with faces white,  
Many hearts were grieved at the sickening sight. (*The Hamstead Mine Disaster*, in Raven 1977: 69)

and:

One woman stood weeping and wailing,  
Her cries were heard far around (*The Miners' Fate*, (Roud 3261) in Korson 1938: 198)

On the other hand, there is stress on the sudden change from happy daily life to violent death. In *The Miners' Doom*, the miner's heart is 'light and gay' as he sets off to work (Lloyd 1978: 202); at Avondale the hearts of the women and children were 'filled with joy' to see the men go to work; they were working 'merrily' (*Harwick Mine Disaster*, in Korson 143: 282). The pleasant scene outside can be invoked:

It was on the eighteenth day of June when flowers were in full bloom,  
The small birds hopped from tree to tree and sweetly chimed their tune (*Charley Hill's Old Slope*, in Korson 1938: 196)

There is great concern for the widows and orphans. *The Donibristle Mossmorran*

*Disaster* (Roud 3509) in Douglas (1995: 48-49) concludes:

But we never shall forget them, nor how they lost their lives,  
So we must pay attention to their children and their wives.  
It simply is our duty, so let us all beware,  
Their fathers died a noble death and left them in our care.

At the end of *The Avondale Mine Disaster* we hear:

They're in their graves till the last day,  
Their widows may bewail,  
And the orphans' cries they rend the skies  
All round through Avondale!

And in the last stanza of *The Trimdon Grange Explosion*:

God protect the lonely widow, and raise each drooping head;  
Be a father to the orphans, never let them cry for bread.

God is frequently invoked, often in passing, but also at greater length. *The Miners' Fate* (in Korson 1938: 199) concludes:

And help us to say, O Father,  
Not my will, but thine, be done.  
Far down, far down in the coal mines  
Where fathers and brothers must stay,  
Till Gabriel shall blow his trumpet  
On the Resurrection Day.

Similarly, in *The Gresford Disaster* (Lloyd 1978: 192):

They have worked out their shift and now they must lie  
In the darkness until Judgement Day.

Regarding the widows and orphans, *The Starlaw Disaster* concludes:

But God is so merciful, as all mankind knows,  
He will share in their sorrow, and soften their woes.

Unstated, perhaps because obvious at the time, is the fact that the widows and orphans were left penniless by the disasters, which might well take several members of the same family, fathers, sons and brothers. Korson (1943: 273) points out that the first time survivors of a disaster got compensation was in 1940 – ninety-one families in that case. In England, *The Gresford Disaster*, which occurred in 1936, tells us:

The Lord Mayor of London's collecting  
To help both our children and wives.  
The owners have sent some white lilies  
To pay for the poor colliers' lives.

There is a hint of anger here - widows and orphans cannot eat lilies - but anger is rarely expressed. For example, Raven (1978: 95) says it is 'interesting' that there had been an explosion at Blantyre two months before the major disaster, yet there is no mention of it in the song. On the whole the disasters seem to be regarded as acts of God, or perhaps the need to compose a ballad immediately, for sale as a broadside to raise at least a little money, meant there was no time to consider blame. Goldstein, in the notes to the record of Sara Cleveland recordings (Philo, 1975), says that a broadside at Avondale 'sold in the hundreds.' There are exceptions:

Someone has been neglectful,  
Or in their duty did fail;  
And thus we read of neglect, indeed,  
At those mines of Monongah (*The Monongah Disaster*, in Korson 1943: 267)

And, as well as the prediction of disaster:

The fireman's reports they are missing,  
The records of forty-two days;  
The colliery manager had them destroyed  
To cover his criminal ways. (*The Gresford Disaster*)

## **The Songs Forgotten**

That, then, is a brief summary of the typical mining disaster ballad, made locally to satisfy a local need. There are other songs, which deal with mining disasters more allusively or in passing, such as *The Old Miner* (Roud 1136, in Palmer 1972: 94) which mentions roof cave-in along with hard work, *A Collier Lad* (Roud 921, in Huntington 1990: 144), another cave-in, or *The Coal Miner's Child* (Roud 457, in Lomax & Lomax 2000: 276-277), where the focus is, in

Dives and Lazarus fashion, on the orphan daughter of a miner and a callous rich man. Of the typical songs, only *The Avondale Mine Disaster* spread to any great extent, being collected by researchers from Michigan (Gardner & Chickering 1967: 298-300) to as far away as Labrador (Leach 1965: 266-267) and Newfoundland (Greenleaf 1968: 123-124). It was also reprinted (see, for example, Friedman 1963: 307-309; Leach 1955: 783-785; Lomax 1960: 130-131). Recordings were made of Sara Cleveland of New York state (available under the title *The Mines Of Irvingdale on Sara Cleveland*, Philo Records, 1975) and John J. Quinn of Pennsylvania in 1946 (available on *Songs And Ballads Of The Anthracite Miners* (Rounder, 1997)). These are the only two recordings mentioned by Cohen (2016) in his survey of 500 LP recordings of Anglo-American folk music, although he does not claim to be exhaustive (p. xi). There seems to be one sung version on YouTube from 2020.

In 1958 there was a roof collapse at the Springhill Mine in Nova Scotia. From this event two songs emerged, *Springhill Disaster* written by Maurice Ruddock, one of seven miners rescued from the cave-in, and *The Ballad Of Springhill* written by musician Peggy Seeger. The latter is recorded very occasionally, perhaps most recently by Landless on *Bleaching Bones* (2018). On *The Iron Muse* Dick Gaughan sang of *The Auchengeich Disaster* of 1959 (in Lloyd 1978: 194-195), which killed 47 miners. Lloyd (196-198) also includes *The Watter's Brokken In*, concerning a flood at the Fishburn Colliery, Co. Durham, in 1968 (353-354), of which I can find no trace. I know of no recording, nor of any later songs.

Raven (1997: 70) writes, concerning *The Hamstead Mine Disaster*:

The value of such pieces as 'The Hamstead Mine' is significantly social rather than literary and their worth as social documents will undoubtedly increase as time passes.

Many of the collectors of mining and other industrial songs were concerned with the lives of working people as much as with the songs themselves. People like A. L. Lloyd and Alan Lomax were decidedly left-wing (Lomax left the USA for some years during the McCarthy era). Korson published in the *United Mine Workers Journal* (Korson 1938: 1) and had union help to gain the confidence of miners (Korson 1943: vii).

Higher on the same page, Raven also writes of 'the poem's McGonagallish rhyming and turns of phrase'. This refers to the Scottish poet William McGonagall (1825-1902), whose verse was, and still is, notoriously terrible, both technically and emotionally, being almost impossible to read aloud and so bathetic that tragic events become comic, as in his description of the Tay Bridge Disaster of 1879.

This applies to many of the songs we have considered. They frequently do not scan, which would make them very difficult to sing, and perhaps they were not intended to be. Lloyd (1978: 152) tells us the ballads were 'to be read or sung at meetings in aid of the widows and children.' To a modern ear they often sound mawkishly sentimental and, indeed, bathetic. In addition, the very precision of detail in dates, names and events that the occasion

demanding makes the songs less appealing to people at a temporal and geographical distance. It is notable that Raven refers to *The Hamstead Mine Disaster* as a 'poem' and a 'piece', and not as a song.

## Song Survival

The survival of old songs depends on their being sung, and today this generally means being sung by remunerated performers (Rouse 2005) for a paying audience. This immediately means that aesthetic considerations are important. Is the song artistically any good?

Henderson (1992: 122) suggests that the writer of *The Starlaw Disaster* put it to the tune of the well-known ballad *The Bonny Boy Is Young But He's Growing* (Roud 31) because one of the dead (William Muir) was a boy of seventeen. (It may be heard sung by Rab Morrison on *Hamish Henderson Collects Volume 2* (2006).) In the ballad a boy dies at the age of seventeen (or eighteen). This would remind the local audience of that death, and subsequent audiences would associate the melody with early death. In other words, the song would fit in to the cultural schema of a folksong audience. Norman Buchan, composer of *The Auchengeich Disaster*, mentioned above, set it to a well-known Scottish tune, *Skippin' Barfoot Thro' the Heather*. In a similar vein, The Albion Band (1992) performed *Gresford Disaster* to the tune of the well-known *How Sweet the Name of Jesus Sounds*, which the colliery band played to the waiting families at the time.

Lloyd (1978: 21) writes of song making by miners:

It goes to the heart, the thought of the pitman stirred by the drama of some strike or disaster, who sits by candle-light with a blunt pen in his fist, staring at a piece of paper on which he has written the opening phrase: 'Come all ye bold miners...', and who wrestles by scratch and score with his rough, stubborn muse, till day dawns and the pit buzzer blows, and another ballad has come bawling or timorous into the world.

Such writers would be familiar with songs on broadsides, directly or indirectly, and would have an idea of how a ballad should be constructed. To confirm this we need only look at the opening of some songs in Korson (1938: 191-199):

Come, friends and fellow Christians, and listen to my tale (*Avondale Disaster*)

and:

Oh, come all you tender Christians,

I pray you will draw near (*The Mines Of Locust Dale*)

and:

Come all ye true born Irishmen wherever you may be (*Charley Hill's Old Slope*)

and:



Kind friends draw nigh and give me your attention (*The Twin-Shaft Disaster*)

Korson mentions the air for the piece on occasion, and Lloyd gives some, so clearly some at least of the pieces were set to music as songs, but the fact remains that most of them have not gone beyond their immediate importance or their value as social documents to become works of art.

There have been mining songs in popular music (*Sixteen Tons* by Merle Travis from 1947, *Working In A Coalmine* by Lee Dorsey from 1966), including disaster songs such as *Big Bad John* by Jimmy Dean in 1961 and *New York Mining Disaster 1941* by The Bee Gees in 1967. Nor should we forget *Palaces Of Gold*, written in response to the Aberfan, Wales, disaster of 1966, when a collapsing coal mine slagheap demolished the village junior school, killing 116 children, mostly aged 7 to 10, and 24 adults. These are all from at least half a century ago. A possible reason for the lack of contemporary interest in many mining songs is that people are not miners and do not know any. In Britain the last deep coal mine closed in 2015 and nobody has a coal fire at home any more. Yet people happily listen to songs about ploughboys with their horses, about highwaymen, about whaling, and about sailing ships in general, including maritime disasters. It does seem that folk song is still assumed to be rural, or nautical, and this may be another reason for the lack of interest. Coal mining is not picturesque, it has no idyllic qualities, and it is a stark reminder of class difference.

## Two Songs

Two songs have survived in fair health, *The Trimdon Grange Explosion* and *The Blantyre Explosion*. The explosion at the Trimdon Grange mine in County Durham, England, took place in 1882, killing 74 miners (Lloyd 1978: 183). The words of the song *The Trimdon Grange Explosion* were written by Tommy Armstrong (1848-1920), and he suggested using the tune of *Go And Leave Me If You Wish It* (Roud 459), a particularly sentimental, and popular, Victorian parlour song (see Gilfellon 1971: 9-10). The song contains many of the features we find in other mining disaster songs: the men and boys setting off for work, the specific names of victims (the brothers Joseph, George and James, mentioned above), the widows and orphans, the invocation of God with hope to meet again in Heaven. The opening has considerable religious undertones:

Let us not think of tomorrow,  
Lest we disappointed be;  
All our joys may turn to sorrow,  
As we all may daily see.

Stanzas three and four (of five) contain the word 'father' five times, and the final stanza asks

God to be ‘a Father to the orphans’. The song teeters on the edge of bathos to a modern listener, particularly to that tune. Roud has only five references, four of which are Lloyd and Gilfellow, which suggests it did not enter the tradition. Yet it is very singable, clearly the work of a skilled songsmith, unlike many of the forgotten songs. It fits in to a tradition of songs for the stage at that time. In more recent years it has been sung from time to time, mainly in England (see Reinhard Zierke’s website *Mainly Norfolk* for examples), including by Alan Price of The Animals, from nearby Newcastle, in 1969, The Mekons in 1987 (on *Honky Tonkin*), and most recently by Karina Knight on *From The Knee* (2020).

The other song to survive in some health is *The Blantyre Explosion*. Roud gives 20 entries (although some are erroneous), from Scotland, Ireland (north and south) and the USA; Korson (1949: 44) includes it, and Laws (1957) classifies it as Q35, suggesting a wider presence in the USA. The explosion occurred at the High Blantyre mine, near Glasgow, in 1877 (Lloyd 1952: 136) killing 209 miners, according to the Northern Mine Research Society.

The Irish singer John Maguire recounts singing the song in a pub in Blantyre (Morton 1973: 68-69) in the 1920s (Morton 1970: 10), when perhaps three others sang a version of the song before he himself sang the ‘right version’. Maguire had been working in the mine himself. One presumes that Irish or Scottish miners carried the song to Ireland and the USA. The Rev. Stewart Wright, writing in 1885, reports that there were ‘not many’ Roman Catholics among the victims at Blantyre (Scottish Mining Website), which suggests the presence of some Irishmen, and a list of names of the victims includes some apparently Irish ones, such as O’Brien, Quin, and Vallyelly (Northern Mine Research Society). Korson (1938: 2) reports on the presence of Welsh and Irish miners in America, among other immigrants, to the extent that ‘the anthracite region’s oldest continuous eisteddfod, which was formed in 1888, has always met on St. Patrick’s Day.’ All this would help explain the spread of the song.

*The Blantyre Explosion* is written in a rather different style to most mining disaster songs. Maguire’s version (Morton 1973: 69, in Lloyd’s enlarged edition, 1978: 180-181) does contain standard elements: the date, the eleventh of December (which is incorrect), the miner going cheerfully to work, his name, Johnny Murphy (Irish), the number of dead - 310 - widows and orphans, the hope for a meeting in Heaven. The version in the original edition of Lloyd (1952: 78) does not have the date, or a hope for a meeting beyond this world, but it does have the man’s name, his age, a ‘calm evening’ before the disaster, the women and children, and the number of dead.

The Lloyd version starts as follows, and Maguire’s is similar:

By Clyde’s bonny banks where I sadly did wander,  
Among the pit-heaps as evening drew nigh,  
I spied a fair maiden all dressed in deep mourning,  
A-weeping and wailing with many a sigh.

I stepped up beside her and thus I addressed her:  
'Pray tell me, fair maiden, of your trouble and pain,'  
Sobbing and sighing, at last she did answer:  
'Johnny Murphy, kind sir, was my true lover's name.

This resembles other folk songs, such as *The Banks Of The Sweet Primroses* (Roud 586), which starts with the famous line 'As I walked out on a midsummer morning', or the cluster of songs known as *The Sailor Cut Down In His Prime* (Roud 2), which goes quickly from a 'bright summer morning' to seeing a body 'colder than clay'. Closer is the group of songs known as broken token ballads, such as *The Dark-Eyed Sailor* (Roud 265) or *The Plains Of Waterloo* (Roud 960). In these a young man returns from the (Napoleonic) wars in disguise and steps up to his old girlfriend whom he happens to meet on the road. He asks why she is sad, and she explains that she is sorely missing her boyfriend and waiting for his return. The listener, familiar with at least some of these other songs, will have certain expectations about how the conversation will go. The broken token ballads end happily as the separated lovers show their half of the ring or other broken token, while, of course, the song of the sailor cut down does not do so. But there is the expected explanation; the song fits a pattern, a model. The Lloyd version twice contains the word 'slain', both times at the end of a line, and thus emphatic. This is an odd word to use of an accident, and echoes the presumed death of the boyfriend in battle in the broken token ballads. The song is also fairly short, five stanzas in Lloyd and seven in Maguire.

Two differences in *The Blantyre Explosion* are the transferred epithet of the sadness of the narrator (Maguire has 'lately' for 'sadly') and the distinctly industrial pit-heaps, but these are minor.

The Lloyd version concludes with a direct address to the audience, 'all you young miners', which is closer to the standard mining disaster songs, but then *The Banks Of The Sweet Primroses* does the same, addressing 'all young men that go a-courting'. Stanza six in Maguire starts as follows:

But they say it's not right for the dead to be grieved

There would seem to be an echo of the very well-known ballad *The Unquiet Grave* (Child 78<sup>3</sup>, Roud 51) which warns against excessive grief. Yet Maguire's version concludes:

The spring it'll come with the flowers of summer,  
That blows through its wildness so lovely and fair,  
I will gather the snowdrops, primroses and daisies,

---

3) Child numbers refer to Child *The English and Scottish Popular Ballads*.

Round my true lover's grave I will transplant them there.

Those flowers would keep her supplied for some months, from early spring to summer. We should note that in Maguire's version everything from the second line of the third stanza is spoken by the young woman. It is similar in Lloyd, except that the final stanza addresses the audience, as we have seen. Many ballads are largely made up of dialogue, so this, too, fits the pattern. Perhaps Maguire fitted his version to other songs he knew.

The song, then, has much to commend it to the modern listener (and performer). It is concise, it is in a recognizable form, both in structure and in language, and it is easy to sing. It is based in a real event, which is appealing (even if the date and/or casualty numbers are wrong). It takes a general disaster and makes it personal, showing us the grief of one bereaved person. This makes it easier for the listeners to imagine themselves as that person. Henderson (1937: 45) prints a broadside on the same disaster entitled *Fearful Colliery Explosion in Scotland* (Roud V51473), which conforms more to the standard mining disaster song, and tells the listener what to feel (starting with a 'dreadful and heartrending sight'). It is long forgotten.

The fairly short, and popular, Larkin poem *The Explosion*, quoted at the beginning of this paper, uses many of the same tropes as the songs: cheerful miners going to work on a lovely day, the sudden explosion, grieving wives, and hopes to meet in heaven (ironic in this case). Good writing can appeal to a wide audience.

Dead, or presumed dead, boyfriend (or girlfriend) songs are not in short supply in folk song, and one thinks of *The Leader of The Pack* and *Tell Laura I Love Her* (dead boyfriend) and *Johnny Remember Me* and *Paint It Black* (dead girlfriend). The song has continued to be fairly widely sung (again, see the Mainly Norfolk website) particularly in Scotland (by The Furrow Collective, for example) and Ireland (by Christy Moore, for example) as well as in Australia (by Tansey's Fancy). There are numerous examples on YouTube.

The absence of deep coal mines in Britain may seem to make mining disaster songs irrelevant there. But mining disasters continue elsewhere. In *Coal Mountain Elementary* (2009), Mark Nowak gives examples of reports and testimony of mining disasters: the Sago, West Virginia explosion of 2006, which killed 12 men, and numerous disasters in China over a two-year period (2005-2006), which killed over 1,000 men (and four women). *The Blantyre Explosion*, *The Trimdon Grange Explosion* and other songs remind us of the price of coal, and their artistic skill ensures that they will continue to be heard.

## References

### Books

- Child, F.J. (2003) *The English and Scottish Popular Ballads*. Five volumes. Reprinted Mineola, New York: Dover.
- Cohen, N. (2016) *Traditional Anglo-American Folk Music: An Annotated Discography of Published Sound Recordings*. Abingdon, Oxon.: Routledge.
- Colls, R. (1977) *The Collier's Rant: Song and Culture in the Industrial Village*. London: Croom Helm.

- Douglas, S. (Ed.) (1995) *Come Gie's a Sang*. Edinburgh: Hardie Press.
- Friedman, A. B. (Ed.) (1963) *The Viking Book of Folk Ballads of the English-Speaking World*. New York: Penguin.
- Gardner, E. E. & G. J. Chickering (Eds.) (1967) *Ballads and Songs of Southern Michigan*. Hatboro, Pennsylvania: Folklore Associates.
- Gilfellow, T. (Ed.) (1971) *Tommy Armstrong Sings*. Newcastle upon Tyne: Frank Graham.
- Greenleaf, E. B. (Ed.) (1968) *Ballads and Sea Songs of Newfoundland*. Hatboro, Pennsylvania: Folklore Associates.
- Grigson, G. (Ed.) (1975) *The Penguin Book of Ballads*. Harmondsworth: Penguin.
- Henderson, H. (1992) 'A Colliery Disaster Ballad', in *Alias MacAlias: Writings on Songs, Folk and Literature* (Ed. A Finlay). Edinburgh: Polygon.
- Henderson, W. (1937) (Ed.) *Victorian Street Ballads*. London: Country Life.
- Huntington, G. (Ed.) (1990) *Sam Henry's Songs of the People*. Athens, Georgia: University of Georgia Press.
- Korson, G. G. (1938) *Minstrels of the Mine Patch: Songs and Stories of the Anthracite Industry*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Korson, G. G. (1943) *Coal Dust on the Fiddle: Songs and Stories of the Bituminous Industry*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Korson, G. G. (1949) *Pennsylvania Songs & Legends*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Larkin, P. (1974) *High Windows*. London: Faber & Faber.
- Laws, G. M. (1957) *American Balladry from British Broadsides*. Philadelphia: American Folklore Society.
- Laws, G. M. (1964) *Native American Balladry*. Revised Edition. Philadelphia: American Folklore Society.
- Leach, M. (Ed.) (1955) *The Ballad Book*. New York: A. S. Barnes.
- Leach, M. (Ed.) (1965) *Folk Ballads and Songs of the Lower Labrador Coast*. Ottawa: National Museum of Canada.
- Lloyd, A. L. (Ed.) (1952) *Come All Ye Bold Miners: Ballads & Songs of the Coalfields*. London: Lawrence & Wishart.
- Lloyd, A. L. (Ed.) (1978) *Come All Ye Bold Miners: Ballads & Songs of the Coalfields*. New, revised and enlarged edition. London: Lawrence & Wishart.
- Lomax, A. (Ed.) (1960) *The Folk Songs of North America*. Garden City, New York: Doubleday.
- Lomax, J. A. & A. Lomax (Eds.) (2000) *Our Singing Country*. Mineola, New York: Dover.
- Morton, R. (Ed.) (1970) *Folksongs Sung in Ulster*. Cork: Mercier Press.
- Morton, R. (1973) *Come Day, Go Day, God Send Sunday*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Nowak, M. (2009) *Coal Mountain Elementary*. Minneapolis: Coffee House Press.
- Palmer, R. (Ed.) (1972) *Songs of the Midlands*. Wakefield: EP Publishing.
- Raven, J. (1977) *The Urban and Industrial Songs of the Black Country and Birmingham*. Wolverhampton: Broadside.
- Raven, J. (1978) *Victoria's Inferno: Songs of the Old Mills, Mines, Manufactories, Canals and Railways*. Wolverhampton: Broadside.
- Ritson, J. (1973) *Northern Garlands*. Wakefield: EP Publishing.
- Rouse, A. C. (2005) *The Remunerated Vernacular Singer: From Medieval England to the Post-War Revival*. Frankfurt-am-Main: Peter Lang.
- White, N. I. (Ed.) (1957) *The Frank C. Brown Collection of North Carolina Folklore*. Seven volumes. Durham, North Carolina: Duke University Press.



## Recordings

- The Albion Band (1992) *Rise Up Like The Sun*. EMI Harvest 0777 7 80058 2 7
- Cleveland, Sara (1975) no title. Philo 1020. (LP)
- The Furrow Collective (2014) *At Our Next Meeting*. Furrow Records FURR007.
- Knight, Karina (2020) *From the Knee*. Blackstone Edge. (Download)
- Landless (2018) *Bleaching Bones*. Humble Serpent HSCD001.
- The Mekons (1987) *Honky Tonkin'*. Twin/Tone Records TTR 87113. (LP)
- Moore, Christy (1985) *Ordinary Man*. WEA 240763-1. (LP)
- Tansey's Fancy (1983) no title. Complete Festivals YPRX2120. (LP)
- Various (1993) *The Iron Muse: A Panorama of Industrial Folk Music*. Topic TSCD465.
- Various (1997) *Songs and Ballads of the Anthracite Miners*. Rounder 18964-1502-2.
- Various (2002) *Songs and Ballads of the Bituminous Miners*. Rounder 18964-1522-2.
- Various (2006) *Hamish Henderson Collects Volume 2*. Kylee 110.

## Websites

- Mainly Norfolk <https://www.mainlynorfolk.info/folk/>
- Northern Mine Research Society, <https://www.nmrs.org.uk/mines-map/accidents-disasters/lanarkshire/blantyre-collinery-explosion-high-blantyre-1877/>
- Scottish Mining Website, <http://www.scottishmining.co.uk/55.html>
- Vaughan Williams Memorial Library <https://www.vwml.org>

# Der Schüler Thomas Bernhard

—Ein Machtkampf zwischen Schule und Literatur—

Atsushi Imai

## ▶ キーワード

Thomas Bernhard Schulkritik  
Autobiographie Österreichische Literatur  
トーマス・ベルンハルト 学校批判 自伝  
オーストリア文学

## ▼ Einleitung

„Die Schule ist die einzige moderne Kulturfrage, die ich ernstnehme und die mich gelegentlich aufregt. An mir hat die Schule vieles kaputtgemacht. Gelernt habe ich dort nur Latein und Lügen“, so schrieb Hermann Hesse rückblickend in einem Brief vom 25. 11. 1904, als er die Buchausgabe seiner Erzählung *Unterm Rad* vorbereitete<sup>1)</sup>.

Diese Äußerung könnte ebenso gut von dem 1931 geborenen österreichischen Autor Thomas Bernhard stammen. Seine 1975 veröffentlichte autobiografische Schrift *Die Ursache* erzählt von seiner Mittelschulzeit, die er von 1944 bis 47 in der Stadt Salzburg verbrachte. Die Einstellung des Ich-Erzählers zur Schule ist sehr kritisch. Als Schüler und Zögling fühlte er sich durch die sadistischen Züchtigungsmethoden und die Lernmaschinerie gemartert. So vertritt er am Schluss die Meinung, „die sogenannten Mittelschulen“ seien „längst als Verrottungszentren der menschlichen Natur erkannt“, „die Welt wäre besser daran“, wenn sie diese „abschaffte“ (U 97)<sup>2)</sup>.

Bernhards Verdikt scheint inzwischen vergessen zu sein. Oder meint man, dass er hier wieder einmal übertrieben habe? Hält man es für angemessen, alle Schuld auf die Zeitumstände zu schieben, also auf den Nationalsozialismus und den Katholizismus, von denen Schule und Internat in Salzburg in der Kriegs- und unmittelbaren Nachkriegszeit beherrscht waren? Hieße

das aber nicht, seine Attacke auf die Schule als eine Variation seiner Österreichkritik zu erledigen? Der Autobiografie-Erzähler schreibt unmissverständlich, dass es die Mittelschulen seien, die „die Natur des Schülers durch faules nutzloses Wissen“ zur „Unnatur“ verbildeten (U 96-97).

Ein solcher Angriff auf die Schule ist nicht neu. Er erinnert an die schulkritischen Texte aus der Literatur der Jahrhundertwende: Wedekinds *Frühlings Erwachen* (1891), Thomas Manns *Buddenbrooks* (1901), Hesses *Unterm Rad* (1905), Emil Strauß' *Freund Hein* (1902), Musils *Törless* (1906) und vor allem Heinrich Manns *Professor Unrat* (1905). Die Schulkritik, die damals in der Literatur geübt wurde, ist nicht minder aggressiv und gleicht auch im Grundzug derjenigen von Bernhard: Ein Heranwachsender mit künstlerischer Begabung könne in der Mittelschule nicht überleben, in ihr werde seine Natur zerstört und, wenn er sich nicht rechtzeitig von ihr befreie, so bleibe ihm nur, sich das Leben zu nehmen.

Dieselbe Thematik findet sich schon bei Hanno Buddenbrook und seinem Schulkollegen Kai Graf Mölln in *Buddenbrooks*, Hans Giebenrath und Hermann Heilner in *Unterm Rad* sowie Heinrich Lindner und Karl Notwang in *Freund Hein*. Von diesen Freundespaaren begeht jeweils ersterer Selbstmord, während der zweite, ein kritischer Geist, der Schule entkommt, um es als „Dichter“ zu versuchen. Nach der Ära der Reformpädagogik, 1930, stellte der österreichische Autor Friedrich Torberg in seinem Roman *Der Schüler Gerber* wieder so einen jugendlichen Protagonisten dar, der aus Wut auf den despotischen, an Professor Unrat erinnernden Lehrer sich das Leben nimmt<sup>3)</sup>.

Was ist dann das Neue an Bernhards Schulkritik? Ist es vielleicht so, dass die Leser darin nur ein altes Lied erkannten und nicht viel Aufhebens davon machten? Im Gegenteil: *Die Ursache* rief zu ihrer Zeit Empörung hervor, da der Erzähler die Stadt Salzburg und ihre Bevölkerung als tödlich für einen jungen Menschen denunziert hatte. Vom ehemaligen Internatsdirektor wurde sogar eine Anklage wegen Ehrenbeleidigung erhoben<sup>4)</sup>. Aber die Schulkritik an und für sich scheint kein großes Aufsehen erregt zu haben, obwohl es doch immerhin neu war, dass Bernhard nicht etwa eine Verbesserung pädagogischer Methoden bzw. eine Reform der Institution, sondern überhaupt deren Abschaffung forderte. Was hat es auf sich, dass Bernhard noch 1975, sich an die Zeit um 1945 erinnernd, dermaßen über die Mittelschule erbost war?

Ein Dichter in der Schule ist oft der Unruhestifter in einer Institution, die jedes Mitglied in ihre Struktur eingeordnet wissen will. Dafür vermittelt die Schule als Sozialisationsinstanz dem einzelnen nicht nur die Möglichkeit zur Integration, sondern auch zum sozialen Aufstieg. Ist indes die Kunst, besonders die Literatur, nicht eine Institution, die, völlig andere Wertvorstellungen vertretend, dem Rebellen die Möglichkeit einer Revanche darbietet? Stehen Schule und Literatur als Agenturen der Sozialisation nicht in ständiger Rivalität? Natürlich ginge es zu weit, wenn ich diese These hier verallgemeinerte. Kann man aber nicht zumindest sagen, dass in der genannten schulkritischen Literatur und auch bei Bernhard dieser Gegensatz bewusst herausgearbeitet ist und dass ihre Texte in diesem Sinne miteinander korrespondieren?

In der vorliegenden Arbeit wird dieser Frage nach der Rivalität zwischen Schule und Literatur bei Thomas Bernhard nachgegangen. In Betracht kommen dabei in erster Linie drei seiner fünf autobiografischen Schriften: *Die Ursache* (1975), *Der Keller* (1976) und *Ein Kind* (1982), in denen „Schule“ und „Lehrer“ als Schlüsselwörter fungieren. Darüber hinaus werden im konkreten Vergleich ihre intertextuellen Bezüge auf die schulkritische Literatur zu Beginn des 20. Jahrhunderts beleuchtet, wobei ein bisher nicht beachteter Zusammenhang dazwischen vermutet wird.

## 1. Thomas Bernhards „autobiografische Pentalogie“

Die von 1975 bis 82 im Salzburger Residenz Verlag veröffentlichten fünf autobiografischen Schriften Thomas Bernhards, *Die Ursache*, *Der Keller*, *Der Atem* (1978), *Die Kälte* (1981) und *Ein Kind* sind sowohl formal wie auch inhaltlich als eine zusammenhängende, kontinuierlich erzählte Textfolge zu betrachten. An ihrer Erzählweise, dem Paratext und anhand außertextueller Äußerungen des Autors<sup>5)</sup> ist die Identität des Autors, des Erzählers und des Protagonisten miteinander – ein wesentliches Merkmal der Gattung Autobiografie – deutlich feststellbar. Inhaltlich geht es um das rückblickende „Erinnern“ des Ich-Erzählers an seine „Kindheit und Jugend“<sup>6)</sup>, an all die Ereignisse von damals, die ihn von heute gemacht haben, nämlich die „Ursachenforschung“<sup>7)</sup>. Dieser Umstand ließ die Herausgeber seiner Werkausgabe deren 10. Band, der aus diesen fünf Schriften zusammengesetzt sind, mit „Autobiografie“ betiteln. Andererseits gibt es wiederholt das Hinweisen von Literaturwissenschaftlern und Bernhard-Biografen darauf, dass ihre Darstellungen stark stilisiert und mit vielen fiktionalen Elementen versehen sind<sup>8)</sup>. Um dies zu argumentieren, beruft man sich oft auf die im Text ausgedrückte Sprachskepsis über die Unmöglichkeit, die Wahrheit mit der Sprache zu erfassen (Ke 135-137). So nannte Hans Höller diese Texte „autobiografische Erzählungen“<sup>9)</sup>, um ihrem Kunstcharakter Rechnung zu tragen. Eva Markart sah in ihnen ein Unternehmen der „Ich-Erfindung“, einen „Versuch, sich eine eigene Vergangenheit in Form einer Geschichte zu entwerfen.“<sup>10)</sup>

Mit ähnlichen Formulierungen Manfred Mittermayers, „Ich-Gewinnung“<sup>11)</sup> oder „Selbst-Erschreibung mit Mitteln der Literatur“<sup>12)</sup>, sei ein weiterer wichtiger Aspekt genannt: Mittermayer unterstreicht, dass es sich hier neben der Ursachenforschung um „ein großangelegtes Szenario der Selbstdurchsetzung eines Ichs“ handelt, „gegen eine Umwelt, die es von Anfang an daran zu hindern trachtet.“<sup>13)</sup> Als die hinderliche Umwelt seien nach Mittermayer in der *Ursache* zum einen die Stadt Salzburg, wo der jugendliche Protagonist lebt, und zum anderen die Familie dargestellt, insbesondere die Mutter, zu der er lebenslang eine schwierige Beziehung hatte.

Werner Michler verweist mit Marcus Mazzari und anderen auf die Institutionenkritik in Bernhards Autobiografie, reiht *Die Ursache* einerseits in die Tradition der kritischen „Schülergeschichten“ seit der Jahrhundertwende und bringt sie andererseits mit der

Institutionenkritik der 68er Bewegung in Zusammenhang.<sup>14)</sup> Allerdings gibt es, soweit ich sehe, keinen dem Text nahen Vergleich der schulkritischen Äußerungen Bernhards mit den betreffenden literarischen Texten zu Beginn des 20. Jahrhunderts.

## 2. Bernhard und die Schule

Nach der Darstellung seiner Autobiografie ging Bernhard in zwei Arten von „Schulen“: zum einen in öffentliche Schulen, d.h. Volksschule, Hauptschule und Gymnasium, und zum anderen in die von ihm so genannten „Schulen“ bei seinem Großvater mütterlicherseits, Johannes Freumbichler, sowie beim Lebensmittelhändler Karl Podlaha. Freumbichler, ein verkannter Salzburger Heimatdichter, beeinflusste den Enkel maßgeblich mit einer Weltanschauung, die in mancher Hinsicht den Wertvorstellungen der dominierenden Gesellschaftsschichten widersprach. Bernhard resümiert, er sei in der Schule seines Großvaters für sein ganzes Leben genau „gegen alle konventionellen Schulen erzogen worden“ (U 94).

Was für ein Lehrer war dieser Freumbichler? Was wollte er in seinem Enkel erreichen? Nach der Aussage des Erzählers, also Bernhards, versucht der Großvater aus ihm „einen Künstler zu machen“ (U 41). So schickt er ihn zum Geigenunterricht und dann zu einem Kunstmaler. Diese Versuche scheitern zwar zuerst, aber nach seinem frühzeitigen Abgang vom Gymnasium wird die Musik neben der Kaufmannslehre zu Bernhards Hauptlebensinhalt. Obwohl die erträumte Karriere als Opernsänger wegen seiner schweren Erkrankung nicht verwirklicht werden kann, liegt sein Lebensziel seitdem im künstlerischen Bereich. Für Bernhards Entwicklung sind aber vor allem die Gespräche mit dem Großvater und die Beobachtungen bei den gemeinsamen Spaziergängen entscheidend. Für den Enkel war es eben der Großvater, „der mich das Leben gelehrt und mich mit dem Leben vertraut gemacht hat, indem er mich zuallererst mit der Natur vertraut gemacht hat. Alle meine Kenntnisse sind zurückzuführen auf diesen für mich in allem lebens- und existenzentscheidenden Menschen.“ (U 89)

Der Autobiografie ist leicht zu entnehmen, wie sehr die Wertvorstellungen des Großvaters das Denken des Enkels leiten und bestimmen. Die Weltsicht des Großvaters könnte man als eine rebellische, philosophisch-künstlerische oder auch literarische bezeichnen, wie der Ich-Erzähler ihn „Philosoph“, „Anarchist“, „Schriftsteller“ und auch „Dichter“ nennt. Nach Bernhards Darstellung war er gegenüber den herrschenden Mächten sehr kritisch eingestellt. Auch die Schulkritik des Ich-Erzählers stimmt mit derjenigen des Großvaters vollkommen überein. Für diesen seien Lehrer „nichts anderes als *Verzieher, Verstörer, Vernichter*“ (Ki 436), und „die Schule an sich sei der Mörder des Kindes“ (Ki 435). Hier ist auf einen intertextuellen Bezug hinzuweisen, nämlich auf die bekannte reformpädagogische Schrift von Ellen Key *Das Jahrhundert des Kindes*, übersetzt ins Deutsche 1902; Dort behandelt ein Kapitel, wie dessen Titel heißt, *Die Seelenmorde in den Schulen*<sup>15)</sup>.

Gleiche Kritik an der Schule wird auch in fiktionalen Texten Bernhards geübt,



beispielsweise von der Figur Atzbacher im Roman *Alte Meister*<sup>16)</sup>. Der Kern dieser Schulkritik ließe sich im Folgenden zusammenfassen: Die Schule verhindere die natürliche Entwicklung der Kinder. Schuld daran seien Lehrer, die als „Handlanger des Staates“<sup>17)</sup> den Schülern das Rückgrat eher brechen als stärken, und die Lehrmethoden, die oft gewalttätig und nur auf das Wissen und die Theorie ausgerichtet seien; infolgedessen werde nicht die Selbstsicherheit der Schüler gefördert, das Leben werde ihnen nur schwer gemacht. Des Weiteren herrsche in der Schule ein Banausentum, das künstlerische Begabungen verachte. Die Schule sei auf jeden Fall ein Instrument des Staates, um junge Menschen abzurichten und sich gefügig zu machen.

Der Autor scheitert im Gymnasium; er muss die zweite Klasse wiederholen und meldet sich ohne Abschluss von der Schule ab. Er tritt eine Kaufmannslehre beim Lebensmittelhändler Karl Podlaha an, in der Scherzhauserfeldsiedlung, dem von Bernhard so genannten „absoluten Schreckensviertel der Stadt“ (Ke 113). Er bezeichnet die Arbeit im Geschäft als „die Hohe Schule der Außenseiter und Armen, die Hohe Schule der Verrückten und der für verrückt Erklärten“ (Ke 113). Der Kontrast ist allzu deutlich: einerseits das Gymnasium, dessen Abschluss gesellschaftliche Anerkennung, ein Studium und eine glänzende Laufbahn verspricht, und andererseits Lehrlingsarbeit inmitten der untersten Schicht der Gesellschaft.

Der Erzähler der Autobiografie gibt an, bei Podlaha etwas gelernt zu haben, was er beim Großvater nicht lernen konnte, nämlich wie man mit Menschen umgeht; er fühlt sich bei der Arbeit zum ersten Mal in seinem Leben „nützlich“ (Ke 114, 118). Somit ergänzen einander die „Schulen“ beim Großvater und bei Podlaha, wie er rückblickend meint:

„Bei meinem Großvater war ich [...] in die philosophische Schule gegangen, beim Podlaha [...] in die größtmögliche und in die absolute Realität. Die zwei frühen Schulen waren für mein Leben entscheidend und, eine die andere ergänzend, sind sie bis heute das Fundament meiner Entwicklung.“ (Ke 150)

Und beide gemeinsam bilden einen Gegenpol zu den öffentlichen Schulen. Der vom Ich-Erzähler wiederholt verwendete Ausdruck „die entgegengesetzte Richtung“ (Ke 113) trifft gut den Sachverhalt: In Bernhards Konflikt mit der konventionellen Schule manifestiert sich der Machtkampf zweier gesellschaftlicher Kräfte, der beherrschenden und der opponierenden.

Darüber hinaus verweist das mit Emphase wiederholte Wort „Nützlichkeit“ auf einen wichtigen Aspekt. An einer allgemeinbildenden Erziehungsinstitution wie dem Gymnasium geht es bekanntermaßen nicht in erster Linie um die Nützlichkeit, sondern um die allseitige Entfaltung der geistigen Kräfte eines Heranwachsenden. Ein typisches Problem der Adoleszenz in der modernen Gesellschaft besteht aber darin, dass der körperlich gereifte junge Mensch noch lange keine Rolle in der Gesellschaft spielen kann, also im Moratorium steckt und es schwer hat, eine Ich-Identität aufzubauen. Hier kann man also eine gute Begründung für die Abschaffung der Mittelschulen herauslesen: Bernhard fühlt sich sowohl in seiner geistigen Entwicklung wie auch in seinen zwischenmenschlichen Beziehungen nicht von der öffentlichen

Schule gefördert, sondern zunächst von seinem Großvater und später durch die Lehrlingsarbeit.

### 3. Bezüge auf die schulkritischen Literaturtexte um die Jahrhundertwende

Bernhards Kritik an der Schule ist, wie bereits erwähnt, nicht neu. In der Literatur um die Jahrhundertwende sind viele Abrechnungen mit der autoritären Schule zu lesen, die denen von Bernhard gleichen. Im Roman *Unterm Rad* von Hesse heißt es z.B. über den Schullehrer:

„Seine Pflicht und sein ihm vom Staat überantworteter Beruf ist es, in dem jungen Knaben die rohen Kräfte und Begierden der Natur zu bändigen und auszurotten und an ihre Stelle stille, mäßige und staatlich anerkannte Ideale zu pflanzen. [...] so muß die Schule den natürlichen Menschen zerbrechen, besiegen und gewaltsam einschränken; [...]“<sup>18)</sup>

Das könnte von Bernhard geschrieben sein. In der *Ursache* lässt sich eine Bemerkung des Großvaters als Anspielung auf Hesses Romantitel lesen, dass man nämlich das Gymnasium zu absolvieren hätte, wenn man „*nicht unter die Räder der Gesellschaft kommen wolle*“ (U 83). Bernhards Beziehung zu Freumbichler erinnert an die respektvolle Beziehung des jungen Hesse zu seinem Großvater mütterlicherseits, dem seinerzeit bekannten Indologen Hermann Gundert, der, den Enkel in Schutz nehmend, dessen strafbare Flucht aus der Klosterschule als „Geniereisle“ bezeichnete<sup>19)</sup>. In *Ein Kind* nimmt auch Freumbichler seinen Enkelsohn in Schutz, nachdem dieser ohne jegliches Wissen der Seinigen, statt zur Volksschule zu gehen, eine große Radfahrt unternommen hatte und über Nacht verschollen gewesen war. Der Großvater würdigt sogar sein Wagnis: „Das ist ja das Geniale an ihm“ (Ki 436).

Mit seiner Schulkritik erinnert Bernhard nicht nur an Hesse, sondern auch an andere Autoren. Das „sogenannte[s] Höhere[s] Wissen“, das das Gymnasium vermittelt, wird in der *Ursache* als „übelstinkende[r] Geschichtsunrat“ (U 96) bezeichnet, der wie aus einem „unerschöpflichen Kübel“ über den Kopf des Schülers ausgeschüttet wird. Der Ausdruck erinnert nicht nur an die entsprechenden Szenen<sup>20)</sup> des Romans *Professor Unrat* von Heinrich Mann, sondern auch an die Schulszene gegen Ende des Romans *Buddenbrooks* von Thomas Mann, wo das Wort „Unrat“ mehrmals vorkommt<sup>21)</sup>. Es gibt zwar keinen Beweis dafür, dass Bernhard die genannten literarischen Texte kannte, aber die Behauptung in der *Ursache*, dass die Mittelschulen „längst als Verrottungszentren der menschlichen Natur erkannt“ und „als solche bewiesen“ seien (U 97), lässt vermuten, dass sich diese Verallgemeinerung auf literarische Kronzeugen stützt.

Neben der Schulkritik umkreist die Erzählung *Die Ursache*, wie Bernhards autobiografische Schriften überhaupt, das Thema Tod. Der junge Protagonist steht in unmittelbarer Nähe zum Tode, nicht nur wegen der Bombenabwürfe auf die Stadt Salzburg, sondern auch wegen der

Suizide von Mitschülern und eigener Selbstmordversuche. Der Ich-Erzähler der Autobiografie bezeichnet „die Lern- und Studierzeit“ allgemein als „Selbstmordgedankenzeit“ (U 18).

In der Tat war Schülerselbstmord seit Ende des 19. Jahrhunderts ein oft aufgegriffenes soziales Problem, das auch in den angesprochenen schulkritischen literarischen Texten um die Jahrhundertwende ein wichtiges Motiv ausmacht<sup>22)</sup>. Noch im Jahre 1929 nahm Friedrich Torberg „durch Zeitungsnotizen zehn Schülerselbstmorde“ „in einer einzigen Woche“ „zur Kenntnis“, wie er am Anfang seines Romans *Der Schüler Gerber* vermerkt. Die Parallele zu Bernhards *Die Ursache*, an deren Beginn eine Zeitungsmeldung über die Selbstmordrate im Bundesland Salzburg steht, ist offensichtlich.

Diese Vorstellung vom Jugendalter als mit dem Tod vertrauter, krisenhafter Lebensphase voll „Sturm und Drang“ verbindet sich im klassischen Jugendalter-Bild, das etwa der Psychologe Eduard Spranger 1924 zeichnete, mit der Vorstellung von der sogenannten „Kulturpubertät“<sup>23)</sup>. Spranger verweist auf den ästhetischen Enthusiasmus, der einen Heranwachsenden in der Pubertät ergreift. Bei Jugendlichen machen sich dann die „Sehnsucht nach Ausdruck“, Träumerei, Kunstschaffen, Theaterbesuche und sehr oft auch der „Lesehunger“ bemerkbar<sup>24)</sup>.

Auch Bernhard beginnt sich, wenn auch ihm von klein auf eine Künstlerlaufbahn zum Ziel gesetzt wurde, erst im Jugendalter wirklich für Kunst zu begeistern. Bei ihm hält diese Begeisterung aber, anders als bei den meisten Jugendlichen, lebenslang an. Als Lehrling eines Lebensmittelgeschäfts hört er oft vom Mönchsberg aus Opern, die in der darunter liegenden Felsenreitschule, einem Veranstaltungsort der Festspiele, aufgeführt werden. Das war sein Musikerlebnis. Um die gleiche Zeit beginnt er bei einer renommierten Sopranistin Gesangsunterricht zu nehmen. Zum Enthusiasmus für Musik kommt dann bald das Schreiben, vor allem von Gedichten, hinzu.

#### **4. Die Zeit der Reformpädagogik und die anti-autoritäre Zeit**

Die angeführten Entsprechungen, die die Schulkritik Bernhards der Literatur um die Jahrhundertwende aufweist, lassen den Leser auf den größeren geistes- und sozialgeschichtlichen Kontext hinblicken. Als solcher für die Jahrhundertwende wird oft auf die autoritäre Schulsituation am Ende des 19. Jahrhunderts verwiesen, aus der die Ansätze der Reformpädagogik und der Jugendbewegung hervorgingen. Der 1881 geborene Johannes Freumbichler gehört zur gleichen Generation wie Brüder Mann, Hesse u.a., erlebte also in seiner Jugend dieselben Umstände. Bernhards Texte bezeugen aber, dass die Schule und das Internat in den 40er und 50er Jahren als die gleiche Zurichtungsmaschinerie auftraten wie etwa vor 50 Jahren.

Darüber hinaus sollte in Rechnung gezogen werden, dass drei Jahre vor dem Erscheinen von der *Ursache* eine bemerkenswerte Streitschrift ins Deutsche übersetzt und diskutiert wurde: *Die Entschulung der Gesellschaft* des österreichisch-amerikanischen Philosophen und Theologen Ivan Illich<sup>25)</sup>. Illich sah im modernen Schulsystem einen Monopolisierungsmechanismus der industriellen Konsumgesellschaft, in der die Schule als die alleinige Instanz berechtigt ist,

den Bildungsgrad der Gesellschaftsmitglieder zu bescheinigen, das Lernen zur Herrschaft und Autoritätserhaltung instrumentalisiert ist, und die strukturelle Ungleichheit der Sozialschichten reproduziert wird. So behauptete er, die Gesellschaft vom Schulsystem zu befreien. Im Lauf der 68er Bewegung standen überhaupt die Bildungsreform, die Alternativschulen und die Institutionenkritik zur regen Diskussion. Es ist sehr wahrscheinlich, dass Bernhard sie als eifriger Zeitungsleser ständig im Auge behielt.

In diesem Zusammenhang ist auch zu bemerken, dass der Autobiografie-Erzähler die Schulen, Heime, Kliniken und Heilanstalten, in denen er sich aufhielt – der junge Bernhard musste aufgrund einer akuten Rippenfellentzündung und der anschließend auftretenden Tuberkulose für längere Zeit im Spital und in Lungenheilstätten behandelt werden – häufig mit „Kerker“ (U 13) oder „Strafanstalt“ (Kä 334) und sich mit „Häftling“ (U 22) vergleicht. Der Anklang an die Institutionenanalyse wie z. B. von Michel Foucault ist nicht zu übersehen, worauf auch Bernhard Judex, Uwe Schütte u.a. hinweisen<sup>26)</sup>.

## 5. Schulversager – ein Verkommener oder ein „Dichter“?

Eine interessante Persönlichkeit in der *Ursache* ist die Figur Pittioni, Geografieprofessor des Gymnasiums. Alle anderen Gymnasialprofessoren verurteilt der Erzähler als „Stumpfsinnige und Kranke“ (U 96), die ohne Gewissen die Zerstörung der Schüler vorantreiben, während Pittioni als einziger mit Sympathie beschrieben wird. Die konträren Professorentypen erinnern beide an die Gestalt des Professors Unrat, der einerseits als Tyrann im Klassenzimmer bestrebt ist, Schüler zu „fassen“ und „hineinzulegen“, andererseits selber als Verstoßener der Gesellschaft, als „Unrat“, der öffentlichen Verspottung ausgesetzt ist. Über Professor Pittioni bemerkt der Ich-Erzähler Folgendes:

„...dieser Pittioni war, solange ich das Gymnasium besucht habe, das Spott- und Hohnopfer aller gewesen, eine unerschöpfliche Quelle von Verhöhnungen und Verspottungen, und dieser Mensch ist mir nach und nach überhaupt zum Mittelpunkt des Gymnasiums geworden ... als das erschreckende Beispiel der Opferbereitschaft eines einzelnen einerseits und einer ganzen brutalen, sich an einem solchen fortwährend und unbekümmert und bedenkenlos vergehenden Gesellschaft andererseits...“ (U 101)

Diese Darstellung des Professors Pittioni, die etwas an Basini, einen Schüler in Robert Musils *Törless* erinnert, welcher der Lynchjustiz einer sadistisch vorgehenden Schüलगemeinschaft zum Opfer fällt, wurde von der Tochter Pittionis später negativ beurteilt:

„Mein Vater hat öfters über Thomas Bernhard gesprochen. [...] Thomas Bernhard hat das Gymnasium wegen seiner schlechten Noten verlassen. [...] Thomas Bernhard hat gelogen

und übertrieben und Sachen erfunden. Er hat über meinen Vater geschrieben, ohne ihn wirklich zu kennen.“<sup>27)</sup>

Ihre Reaktion ist verständlich, da ihr Vater, wie es in der Literatur üblich ist, nicht unbedingt idealisiert dargestellt wurde. Das Interessante an ihrer Bemerkung sind vielmehr die dahinterstehenden gängigen Wertvorstellungen. Ihre Vorwürfe gehen ins Leere. Ein „Dichter“ ist von jeher einer, der lügt, übertreibt und Geschichten erfindet. Der Vorwurf, dass Bernhard wegen seiner schlechten Noten das Gymnasium verlassen habe, stützt sich auf die schablonenhafte Vorstellung, dass ein Schulversager ganz allgemein ein Verkommener sein müsse. Für diese Denkweise, die bürgerliche Normen widerspiegelt, legt die Schule den zukünftigen Stellenwert eines Menschen innerhalb der Gesellschaft fest.

## 6. Schluss – die „literarische Opposition“

Ist es aber nicht so, dass sowohl bei Bernhard wie auch in der schulkritischen Literatur seit der Jahrhundertwende die Auffassung vertreten ist, dass innerhalb der Literatur, und zwar Literatur als gesellschaftlicher Sphäre, wohin man sich oft mit Emanzipationswünschen und Oppositionsvorhaben gegenüber der strikt geregelten und institutionalisierten Wirklichkeit hingibt, der entgegengesetzte Maßstab gelten sollte?

Rhetorisch könnte man sogar fragen: Wer ist denn nicht aus der Schule davongelaufen, der sich später als Schriftsteller einen Namen machte? Die Brüder Mann, Hesse, Musil, Döblin, Ernst Jünger, Friedrich Torberg und so weiter und so fort. Die Liste der erfolglosen Schüler in dieser Branche ließe sich ins Unendliche fortsetzen. Es scheinen die Worte Rainer Maria Rilkes mindestens für Schriftsteller zuzutreffen: „Man lese die Lebensgeschichte aller großen Menschen; sie sind, was sie geworden sind, immer *trotz* der Schule geworden, nicht durch sie.“<sup>28)</sup>

Diese Auffassung könnte auch die verborgene Erwartung der Leserschaft widerspiegeln. Wer sich literarischen Tätigkeiten hingibt und damit Erfolg haben will, soll damit ein Gegenkonzept zur herrschenden Wertordnung liefern. Er soll also nicht die etablierten Systeme weiter pflegen und stabilisieren, sondern sie in Frage stellen. Er soll etwas Neues schaffen, um sie ständig zu erneuern. In diesem Sinne sollte man auch den Ausdruck „literarische Opposition“ in der folgenden Äußerung von Thomas Mann verstehen:

„Ich verabscheute die Schule und tat ihren Anforderungen bis ans Ende nicht Genüge. Ich verachtete sie als Milieu, kritisierte die Manieren ihrer Machthaber und befand mich früh in einer literarischen Opposition gegen ihren Geist, ihre Disziplin, ihre Abrichtungsmethoden.“<sup>29)</sup>

Thomas Bernhard prangerte alles an, was institutionalisiert ist: Schulen, Heime, Spitäler, Behörden, vor allem den Staat, aber auch Festspiele und Literaturpreise. Er nahm zwar seine



Preise immer in Empfang, aber rief oft durch seine kritischen Äußerungen Skandale hervor, genauso wie bei den Salzburger Festspielen, in deren Rahmen einige seiner Dramen aufgeführt wurden. Bei ihm richtet sich also die „literarische Opposition“ ebenfalls an Kunst und Literatur, wenn sie das Anzeichen bekommen, normativ, autoritär und *schulmäßig* zu werden.

Huldigt die Gesellschaft ihren „Dichtern“ nicht gerade deswegen, weil sie zu ihrer Lebzeit verkrustete Machtverhältnisse beim Namen nannten? Und werden nicht eben diese Autoren, so kritisch sie auch zur Gesellschaft waren, nach ihrem Tode von ihr vereinnahmt, wie es Thomas Bernhard paradigmatisch darstellt, der vom „Skandalautor“ von einst zum „Nationaldichter“ von heute avanciert ist?

## Notes

Die vorliegende Arbeit ist die Bearbeitung eines Textes, den der Verfasser am 8. 6. 2019 bei der Germanistentagung an der Gakushuin-University, Tōkyō, vorrug.

- 1) Hesse, Hermann: *Gesammelte Briefe*. 1. Bd. 1895-1921, Frankfurt a. M. 1973, S. 130.
- 2) Bernhard, Thomas: *Werke in 22 Bänden*, Bd. 10: *Die Autobiographie (Die Ursache, Der Keller, Der Atem, Die Kälte, Ein Kind)*. Hg. von Martin Huber und Manfred Mittermayer. Frankfurt a.M. 2004. Zitate aus diesem Band sind in der Folge mit Siglen und Seitenzahlen in Klammern versehen. Das Sigel U steht für *Die Ursache*, Ke für *Der Keller*, At für *Der Atem*, Kä für *Die Kälte* und Ki für *Ein Kind*.
- 3) All die genannten literarischen Texte haben, wie die Forschung es vielfach herausstellte, nicht wenige autobiografische Elemente. Oft wurde darauf hingewiesen, dass in diese beiden Schülertypen der Autor selbst projiziert ist, was uns dazu berechtigen würde, diese Texte auf gleicher Ebene wie Bernhards Autobiografie zu behandeln. Von der zahlreichen Forschungsliteratur über die schulkritischen Literaturtexte um die Jahrhundertwende sei hier nur die folgende des Verfassers genannt, dort gibt es umfassende Literaturangaben: Imai, Atsushi: *Das Bild des ästhetisch-empfindsamen Jugendlichen. Deutsche Schul- und Adoleszenzromane zu Beginn des 20. Jahrhunderts*. Wiesbaden 2001. (zugl.: Innsbruck, Univ., Dissertation, 1999)
- 4) Vgl. Mittermayer, Manfred / Veits-Falk, Sabine (Hg.): *Thomas Bernhard und Salzburg. 22 Annäherungen*. Salzburg 2001, S. 209-218 (17 Salzburger Erregungen: *Die Ursache*).
- 5) Bernhard selbst bezeichnete diese fünf Texte als seine „Biografie“. Vgl. Huber, Martin; Mittermayer, Manfred (Hg.) *Bernhard-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung*. Stuttgart 2018, S. 167. Von seinen öffentlichen Äußerungen zu *Die Ursache* ist das folgende Interview sehr aufschlussreich: *Aus Schlagobers entsteht nichts*. Interview von Rudolf Bayr, 12.9.1975 (ORF). In: Bernhard, Thomas: *Werke in 22 Bänden*. Bd. 22-2, Berlin 2015, S. 67-78.
- 6) In einer Besprechung mit Siegfried Unseld, dem Chef des Suhrkamp Verlags, kam Bernhard 1972 das erste Mal auf sein autobiografisches Projekt zu sprechen, dem er den provisorischen Titel „Erinnern“ gab. Nachdem dieses Projekt aber beim Residenz Verlag als die genannten fünf Schriften verwirklicht wurde, schlug Unseld 1983 vor, daraus ein Buch mit dem Titel „Kindheit und Jugend“ zu machen und im Suhrkamp zu veröffentlichen. Vgl. *Kommentar*. In: Thomas Bernhard: *Werke in 22 Bänden*. Bd. 10, a. a. O., S.513-525, hier S. 517 und 523.
- 7) Dieses Wort verwendet Manfred Mittermayer in seiner Bernhard-Biografie für den Titel des Kapitels, das diese fünf Schriften behandeln. Das Wort stammt aus dem Essay Bernhards: *Unsterblichkeit ist unmöglich*. Vgl. Mittermayer, Manfred: *Thomas Bernhard. Eine Biografie*. Wien / Salzburg 2015, S. 260.
- 8) Vgl. z. B. Höller, Hans: *Thomas Bernhard*. Reinbeck bei Hamburg 1993, S. 97-108; Huguët, Louis:

- Chronologie. Johannes Freumbichler – Thomas Bernhard.* Weitra o. J. [1995].
- 9) Höller, a. a. O., S. 102.
  - 10) Marquardt, Eva: *Gegenrichtung. Entwicklungstendenzen in der Erzählprosa Thomas Bernhards.* Tübingen 1990, S.163-164 (Zitiert nach: Mittermayer, Manfred: *Thomas Bernhard.* Stuttgart / Weimar 1995, S. 89.)
  - 11) Mittermayer: *Thomas Bernhard,* a. a. O., 1995, S. 84.
  - 12) Mittermayer, Manfred: „...*ich hatte immer nur ich werden wollen*“. *Thomas Bernhards autobiografische Erzählungen.* In: Mittermayer / Veits-Falk (Hg.): *Thomas Bernhard und Salzburg,* a. a. O., S. 13-30, hier S. 14.
  - 13) Ebenda, S. 16.
  - 14) Vgl. Michler, Werner: *Die Ursache. Eine Andeutung.* In: Huber / Mittermayer (Hg.): *Bernhard-Handbuch,* a. a. O., S. 169-173, hier S. 170.
  - 15) Vgl. Key, Ellen: *Das Jahrhundert des Kindes.* Studien. Autorisierte Übersetzung von Francis Maro, Berlin <sup>11</sup>1905, hier S. 219-249.
  - 16) Bernhard, Thomas: *Werke in 22 Bänden,* Bd. 8, *Alle Meister.* Hg. von Martin Huber und Wendelin Schmidt-Dengler. Frankfurt a.M. 2008, S. 33-40.
  - 17) Ebenda, S. 35.
  - 18) Hesse, Hermann: *Unterm Rad.* In: ders.: *Gesammelte Werke in 12 Bänden.* Bd. 2, Frankfurt am Main 1970, S. 50.
  - 19) Hesse, Hermann: *Großväterliches.* In: ders.: *Gesammelte Werke in 12 Bänden.* Bd. 10, Frankfurt a. M. 1970, S. 309.
  - 20) Vgl. Mann, Heinrich: *Professor Unrat oder das Ende eines Tyrannen.* Roman. Studienausgabe in Einzelbänden. Hrsg. von Peter-Paul Schneider. Frankfurt a.M. 1989, S. 35 und 212.
  - 21) Vgl. Mann, Thomas: *Gesammelte Werke in 13 Bänden.* Bd. I, *Buddenbrooks. Verfall einer Familie.* Frankfurt a.M. 1974, vor allem S. 720.
  - 22) Ludwig Marcuse z.B. erinnert sich an die Situation der Jugend zu Beginn des 20. Jahrhunderts: „Lehrerschaft und Elternschaft in *Frühlings Erwachen* sind nur milde Abbilder, weil sich hier als Karikatur gibt, was beklemmende Wirklichkeit war. Tausend Broschüren von damals über ‘Schülerselbstmorde und das Elternhaus’ können die Historiker unterrichten.“ Marcuse, Ludwig: *Mein zwanzigstes Jahrhundert. Auf dem Wege zu einer Autobiographie.* Zürich 1975, S.21f.
  - 23) In Betreff der Kulturpubertät und der Identitätsbildung im Jugendalter vgl. Eggert, Helmut / Garbe, Christine: *Literarische Sozialisation.* Stuttgart / Weimar, 1995, S.114-135 sowie Spranger, Eduard: *Psychologie des Jugendalters.* Heidelberg 1979 (Erstausgabe: 1924), S. 301. Das letztere fand bis in die 80er Jahre eine weltweite Verbreitung.
  - 24) Eggert / Garbe, a. a. O., S. 118. Vgl. auch Spranger, a. a. O., S. 58-80. Der Erziehungswissenschaftler Werner Graf hat 1980 den Begriff „literarische Pubertät“ eingeführt. Graf, Werner: *Literarische Pubertät. Überlegungen zu Interviews mit erwachsenen Lesern.* In: *Der Deutschunterricht* 5/1980, S. 16-24.
  - 25) Vgl. Illich, Ivan: *Entschulung der Gesellschaft. Eine Streitschrift.* Aus dem Englischen von Helmut Lindemann und Thomas Lindquist, München <sup>7</sup>2017.
  - 26) Vgl. Judex, Bernhard: *Thomas Bernhard. Epoche – Werk – Wirkung.* München 2010, S. 107 sowie Schütte, Uwe: *Thomas Bernhard.* Köln / Weimar / Wien 2010, S. 56.
  - 27) Huguet, a. a. O., S. 256.
  - 28) Rilke, Rainer Maria / Key, Ellen: *Briefwechsel.* Frankfurt a.M. 1993, S. 252.
  - 29) Mann, Thomas: *Lebensabriß.* In: ders. : *Gesammelte Werke in 13 Bden.* Bd. 11, Frankfurt a. M. 1974, S. 98-144, hier S. 99.



# El itinerario de un brigadista japonés-estadounidense: Jack Shirai y la Guerra Civil española (2)

—Reflexiones sobre su trayectoria en la batalla del Jarama—

Keishi Yasuda

## ▶ キーワード

Guerra Civil española  
Brigadas Internacionales  
Jack Shirai, batalla del Jarama

### ▼ Resumen

Tras el fin de la Guerra Civil (1936-1939), el acontecimiento más trágico y sangriento de la historia de España en el siglo XX, han pasado más de ochenta años. Esta investigación tiene por objeto describir esencialmente la vida de Jack Shirai, un voluntario japonés de las Brigadas Internacionales en esta contienda, procedente de Estados Unidos, y la de otros brigadistas norteamericanos. En concreto se centra en la etapa de Shirai en la batalla del Jarama (6-15 de febrero de 1937), principalmente durante su itinerario en el batallón Abraham Lincoln.

### Introducción

Tras el fin de la Guerra Civil (1936-1939), el acontecimiento más trágico y sangriento de la historia de España en el siglo XX, han pasado más de ochenta años. En el presente estudio se trata de la vida de Jack Shirai, un soldado japonés que luchó a favor de la República española en esta contienda. Según las palabras de Ayako Ishigaki, escritora nipona que

mantuvo una relación de amistad con él cuando ambos vivían en Nueva York, Shirai optó por un camino que ninguno de sus paisanos hubiera seguido y, como consecuencia de ello, perdió su vida.<sup>1)</sup>

Según se cree, Jack Shirai nació en Hakodate, provincia japonesa de Hokkaido, alrededor de 1900 y vivió como huérfano en un orfanato de allí hasta su adolescencia. Siendo marinero, Shirai inmigró a Estados Unidos de forma ilegal. Éste permaneció en Nueva York como cocinero de un restaurante japonés hasta dirigirse a España. En este período, presencié el *crac* del 29, y ante esa situación social inestable se afilió al Partido Comunista de Estados Unidos. Cuando estalló la guerra de España en 1936, el Partido Comunista de allí se encargó de reclutar a los voluntarios y Shirai decidió ir a España. Finalmente, entró en España como soldado y cocinero del batallón Abraham Lincoln de las Brigadas Internacionales (precisamente en la XV Brigada Internacional) en enero de 1937, y al cabo de seis meses pereció en el campo de batalla.<sup>2)</sup>

El presente año 2021 se cumple el 85 aniversario del inicio de la Guerra Civil que tuvo lugar entre los republicanos y los nacionales. Estos últimos estaban liderados por las autoridades castrenses que llevaron a cabo el levantamiento militar el 17 de julio de 1936. El fracaso de este intento de sublevación militar condujo a la Guerra Civil española al día siguiente. Esta investigación, continuación del artículo que publicó el autor en 2012<sup>3)</sup>, tiene por objeto describir esencialmente la vida de Jack Shirai y la de otros brigadistas estadounidenses, centrándose en su etapa de la batalla del Jarama (6-15 de febrero de 1937), uno de los episodios más importantes y duros de la contienda española, principalmente durante su itinerario en el batallón Abraham Lincoln.

## 1. El frente del Jarama

El 5 de febrero de 1937, los nacionales llevaron a cabo la operación de cortar la carretera Madrid-Valencia, con el fin de cumplir la misión fallida iniciada en noviembre del 1936: tomar la capital española que ocupaban los republicanos. Las tropas nacionales mandadas por el general Luis Orgaz Yoldi, militar que venía apoyando al general Franco, líder de los nacionales, desde el proceso preparatorio del alzamiento militar, se lanzaron a la ofensiva en dirección al río Jarama, en un frente de unos 25 kilómetros en torno a San Martín de la Vega.<sup>4)</sup> Este ataque fue secundado por seis baterías de 155 milímetros y un grupo de artillería alemana de la Legión Cóndor dotado de cañones de 88 milímetros.<sup>5)</sup> El día 8 llegaron a las márgenes del Jarama.

El mismo día, las tropas republicanas dirigidas por el general José Miaja Menant, encargado de organizar la defensa de Madrid, apoyadas por carros de combate y aviación, contraatacaron con fuerza.<sup>6)</sup> En esta acometida intervinieron nuevamente las Brigadas Internacionales. El día 6, el batallón Británico, el “6 de febrero” (franceses, belgas y húngaros) y el Dimitrov, cuyos integrantes eran mayoritariamente de origen eslavos (búlgaros, rumanos,

yugoslavos, húngaros, albaneses, polacos, rusos...), todos de la XV Brigada Internacional, a la que pertenecería el Abraham Lincoln, ya se habían dirigido al frente del Jarama.<sup>7)</sup>

Finalmente, el día 12 el Abraham Lincoln, que se encontraba en Villanueva de la Jara, recibió una orden de desplazamiento hacia el mencionado frente. Sin embargo, los soldados se vieron obligados antes a atender el discurso de André Marty nuevamente en Albacete. En esta ocasión, declaró jactanciosamente que los brigadistas debían poseer un rifle espléndido y estar bien entrenados. Después de la disertación se suministró un rifle a cada soldado, pero éstos no tuvieron tiempo para ensayar el disparo hasta la salida de Albacete, que se efectuó durante la noche de ese mismo día.<sup>8)</sup> En contradicción con su declaración, Marty descuidaba el entrenamiento de sus brigadistas. Teniendo en cuenta esta falta de instrucción y por la inexistencia de ningún tipo orden para que se entrenasen por parte de Marty, se puede inferir una latente actitud de menosprecio de éste hacia la vida de sus soldados.

El día 16, el batallón Abraham Lincoln compuesto de 428 combatientes, llegó a Chinchón, localidad ubicada a unos 45 kilómetros al sudoeste de Madrid. Este pueblo distaba aproximadamente unos diez kilómetros de la primera línea del frente del Jarama. Allí Robert Merriman, comandante del batallón, permitió a sus soldados que descargaran cinco tiros a modo de ensayo.<sup>9)</sup> Este acontecimiento marcó el primer entrenamiento para ellos. Hecho que corroboró que no eran “soldados bien entrenados” como había dicho Marty.

No obstante, en comparación con el batallón Británico, el Abraham Lincoln tuvo suerte, ya que los brigadistas ingleses fueron al frente sin haber realizado ningún disparo. El día 11 por la noche cada uno recibió un rifle de fabricación soviética y 150 municiones, y justo después se vieron obligados a hacer una salida al frente.<sup>10)</sup> En el duro enfrentamiento del día 12, el Británico se expuso a los mayores peligros del ataque nacional y sufrió gravemente por su inexperiencia. Las tres compañías de este batallón defendieron algo más de siete horas la pendiente que recibió el nombre de la “Colina del Suicidio” (“Suicide Hill”). Allí, este batallón se expuso a los mayores peligros del ataque nacional y hubo de pagar las consecuencias de su inexperiencia. Cayeron, víctimas de este combate, 375 soldados de un total de 600 efectivos.<sup>11)</sup>

El mismo día, el batallón “6 de febrero” con unos 800 soldados y el Dimitrov formado por 800 combatientes, comenzaron a librar el combate, y también sufrieron numerosas bajas. La primera compañía del “6 de febrero” y la segunda del Dimitrov fueron totalmente aniquiladas. Al concluir el día 12, las fuerzas nacionales tomaban el puente de San Martín de la Vega, esencial para proseguir la ofensiva de Franco. Las bajas del bando republicano ascendieron al 50 % de los soldados.<sup>12)</sup>

Las pugnas del día 14 se caracterizaron por una dureza excepcional que superó a la de los días anteriores. El batallón Dimitrov quedó reducido a unos 300 soldados y de los 225 supervivientes del Británico apenas quedaron 125 al concluir la jornada. Las tropas nacionales llegaron a ocupar la pendiente del Pingarrón, una elevación de 693 metros de altura, ubicada a unos dos kilómetros al sur de la carretera que va de Morata de Tajuña, una ciudad situada a unos cuatro kilómetros del frente del Jarama, a San Martín de la Vega. Al día siguiente, la XV



Brigada Internacional se encargó de controlar el alto del Pingarrón, pero no lo logró y el Británico perdió una compañía completa. Entre el día 13 y el 16, las fuerzas de Franco consiguieron adelantar sus líneas hacia Morata de Tajuña.<sup>13)</sup>

## 2. La vida diaria en el frente

El día 17 a las tres de la mañana, el batallón Abraham Lincoln se desplazó desde Chinchón hasta Morata de Tajuña donde se encontraba el Cuartel General de la XV Brigada Internacional.<sup>14)</sup> Luego se dirigió a su posición en el frente. La del enemigo estaba en una elevada cresta a unos 900 metros por delante de la del Abraham Lincoln. En este batallón se decidió establecer el depósito de víveres y la cocina en un chalet cerca de su posición.<sup>15)</sup> Jack Shirai, el brigadista japonés, se convirtió en el responsable de la cocina. A él le acompañaron dos ayudantes, Mel Offsink y Max Krauthamer, que serían los mejores amigos de Shirai durante la contienda. Harry Fisher, uno de los compañeros de Shirai en el batallón, conversó varias veces con ellos y lo recordaba en su libro de memorias de la siguiente manera:

Quando mejor me lo pasaba era cuando hablaban de sus planes para el futuro. Después de la guerra iban a abrir un restaurante entre los tres en el que cualquiera que hubiera luchado en España no tendría que pagar por la comida. Clavarían en el precio a los ricos y abrirían su cocina a los pobres.<sup>16)</sup>

Es indudable que estos tres soldados entablaron una buena amistad, de tal manera que llegaron a planear un futuro negocio juntos para después de la guerra. Sin embargo, los tres perderían su vida a lo largo de la contienda y su sueño no se convertiría en realidad.

El día 23 las tropas nacionales se encontraban en el frente entre el Pingarrón y San Martín de la Vega. Este día el Abraham Lincoln iba a atacar al enemigo en la parte norte de la carretera de San Martín de la Vega. Los brigadistas llegaron a una colina relativamente elevada mientras las tropas enemigas se encontraban unos 350 metros por delante. Según el plan del ataque, el día 23 a las siete de la mañana, en primer lugar, dos tanques soviéticos debían romper las líneas enemigas, y, en segundo lugar, los brigadistas debían ocupar las posiciones del adversario.<sup>17)</sup>

El día 23, una hora antes de anochecer, dos tanques marcharon desde la carretera de San Martín de la Vega hacia la posición del Abraham Lincoln. Entonces se lanzó un ataque con los tanques y ametralladora. Los brigadistas hicieron una salida desde las trincheras y envistieron con fuerza al enemigo, mientras que los nacionales tardaban mucho en reaccionar debido a la acometida de los tanques. Uno de estos, sin embargo, se envolvió en llamas tras recibir un cañonazo del adversario. El otro tanque se refugió a un sitio seguro, en tanto que los brigadistas se quedaron alrededor del tanque en llamas. Súbitamente los adversarios lanzaron una descarga cerrada y los brigadistas se escondieron en un arbolado de olivos. Allí, la mayoría

de ellos tuvieron que tenderse boca abajo en el suelo. Algunos abrieron una trinchera. A ninguno de ellos le fue posible contraatacar.<sup>18)</sup>

A las diez de la noche, los brigadistas recibieron la orden de evacuación. Hasta ese momento, 20 soldados habían muerto y otros 40 habían resultado heridos. Aunque el Abraham Lincoln fracasó en el intento de dominar la posición enemiga, el número de bajas fue relativamente pequeño. Pero Merriman informó al Cuartel General de la XV Brigada Internacional que había más muertos y heridos de los reales. Con ello trató de enfatizar el tremendo esfuerzo de sus brigadistas en el primer combate. A partir del siguiente enfrentamiento, este número iría en aumento y no haría ya falta que Merriman exagerara las cifras.<sup>19)</sup>

Pues bien, en el chalet donde se encontraba la cocina del batallón, también estaba situado el barracón de primeros auxilios. El Dr. William Pike era el médico, y allí conoció a Shirai. Cuando se inició el combate en el frente, éste se ocupó del transporte de los heridos entre el barracón y del hospital de campaña. Además, hizo posible que las ambulancias circularan mejor, y ofreció camiones con ducha a las unidades en el frente del Jarama. El Dr. Pike reconoció que Shirai era inteligente y siempre se las ingeniaba en el trabajo.<sup>20)</sup>

Este médico del batallón relató a You Kawanari, prestigioso especialista japonés en los estudios sobre Shirai, la manera de trabajar del soldado nipón en una entrevista, en septiembre de 1985. En el frente del Jarama, en pleno invierno, los brigadistas permanecían estacionados en medio de un frío intenso, por eso solían tener la moral baja. Para colmo, tenían que tomar la comida fría, puesto que la cocina del batallón estaba separada un kilómetro de la posición de los brigadistas, situada –esta última– en la cima de una colina. Shirai buscó un medio para que pudieran tomarla caliente y ordenó a sus dos ayudantes, Mel Offsink y Max Krauthamer, que entre estos dos sitios tendieran una cuerda e instalaran una caja de madera con garrucha. El brigadista japonés empezó a meter la comida recién hecha en la caja y enviársela por la cuerda. Los brigadistas pudieron disfrutar de la comida caliente y agradecieron de corazón el ingenio de Shirai.<sup>21)</sup>

El 25 de febrero unos ochenta reclutas norteamericanos llegaron al frente del Jarama pasando por Albacete. Antes de salir al combate, aprendieron la manera de manejar el rifle en una hora. Sus instructores eran los soldados que habían tenido experiencia militar tan solo de una semana.<sup>22)</sup> Harry Fisher describía a estos novatos como sigue:

A medianoche, un grupo de ochenta norteamericanos recién llegados se juntó al grupo. Ninguno de los hombres de refuerzo había disparado antes, ni siquiera habían tenido en las manos un fusil. Se les dieron fusiles y balas y se les dijo que estuviesen listos para atacar en unas pocas horas. Los recién llegados estaban llenos de ímpetu y entusiasmo, dispuestos a llevar a cabo cualquier cosa que les fuese ordenada.<sup>23)</sup>

Pese a su inexperiencia militar, hervían en deseos de intervenir en la batalla. Sin embargo, la mayoría de estos serían víctimas del siguiente enfrentamiento, el día 27.

Ese día a las siete de la mañana, las fuerzas aéreas republicanas iban a bombardear el frente enemigo del Jarama. El plan era que la artillería acompañaría el ataque y la compañía de tanques se abalanzaría sobre la posición adversaria con tal de que el Abraham Lincoln cargara contra los rivales. Con todo, no se llevó a cabo lo planificado. No aparecieron fuerzas aéreas, ni artillería, ni compañía de tanques. Al cabo de media hora, los brigadistas, que permanecían en las trincheras del frente, oyeron una detonación de fusil de los adversarios y les lanzaron una descarga cerrada. Pero luego recibieron un duro contraataque, quedando aislados en las trincheras.<sup>24)</sup>

Mientras tanto, Merriman pidió al Cuartel General de la XV Brigada Internacional el ataque de la fuerza aérea y de los blindados. El Cuartel General le ordenó que mostrara alguna señal que pudiera facilitar la localización de los brigadistas. Los soldados decidieron formar la letra “T”, grande, con unas camisetas y toallas blancas en su posición. Dos brigadistas se ofrecieron a salir de las trincheras y materializarla, pero tras cumplir la misión cayeron ante las balas enemigas. Con motivo de este acontecimiento, el ataque adversario se intensificó.<sup>25)</sup>

Aunque poco después, dos tanques vinieron a cubrirles, la situación no mejoró. Entonces Vladimir Copic, jefe croata de la XV Brigada Internacional, dio el ultimátum de atacar a Merriman por teléfono. El comandante del batallón Abraham Lincoln lo rechazó porque de lanzar ataques, temía la alta probabilidad de que todos sus hombres podían acabar siendo eliminados nada más salir de las trincheras. Al final Copic acreditó a dos oficiales ingleses en el Cuartel General para que fueran a la posición del Abraham Lincoln y le obligaran a atacar las líneas enemigas. Merriman, al ver a estos dos oficiales, se dio cuenta de que ya no había más remedio que emprender una arriesgada operación ofensiva. A las diez, los brigadistas salieron de las trincheras. Al cabo de unos treinta segundos, los adversarios lanzaron una descarga cerrada. El combate, durante los diez minutos posteriores, fue un infierno para los brigadistas. Las víctimas fueron acumulándose una tras otra y, aunque no murió, Merriman recibió una herida grave en el hombro.

Por la tarde empezó a llover. Este tiempo sirvió a los brigadistas para moverse de su posición, porque la oscuridad, reforzada por la lluvia, tapó la visión a los enemigos y les impidió mantener una descarga constante de disparos. Los soldados ilesos pudieron llevar a sus compañeros heridos hasta las trincheras. Allí, un gran número de malheridos perdieron su vida por la falta de atención médica y por el frío intenso. Después de anochecer, los brigadistas lograron replegarse a las trincheras. Los heridos que no podían andar tuvieron que aguantar el frío que arreció por la noche y el hambre. Al rayar el alba, los soldados que sobrevivieron a este combate retiraron los cadáveres hasta las trincheras y los enterraron.

Tras la batalla de este día, en el batallón sólo quedaron 90 soldados listos para el combate. Según la indagación de Herbert L. Matthews, corresponsal del *New York Times* en Madrid, que fue al frente del Jarama acompañando al Abraham Lincoln, sólo el día 27 murieron 127 brigadistas y fueron heridos 175.<sup>26)</sup> Hasta este último día de la batalla del Jarama, los republicanos perdieron unos 25.000 hombres y los nacionales alrededor de 20.000.<sup>27)</sup> Tanto los

republicanos como los nacionales hicieron un gran sacrificio en esta batalla. A partir de este momento, el frente del Jarama quedó paralizado. Después de todo, las tropas republicanas habían logrado defender la carretera Madrid-Valencia hasta el último momento. A pesar de que unos 2.800 voluntarios extranjeros perdieron su vida, los brigadistas contribuyeron al fracaso final del intento de los nacionales.<sup>28)</sup>

### 3. La llegada de nuevos responsables

En marzo, los soldados del Abraham Lincoln se vieron obligados a volver a las trincheras en el Jarama con el fin de guardar el frente. Durante los primeros días de ese mes, Copic mandó a los brigadistas del batallón que eligieran a un nuevo comandante, en lugar de Merriman que estaba gravemente herido. En resultado, Martin Hourihan, marinero, de 27 años, de origen irlandés, fue nombrado para este cargo.<sup>29)</sup>

El mismo mes, el Partido Comunista estadounidense envió a España a sus miembros más jóvenes como nuevos responsables de los brigadistas norteamericanos. Los directivos del partido se preocupaban por las numerosas bajas en el Abraham Lincoln en la batalla del Jarama y juzgaron que el defecto del batallón radicaba en el exceso de brigadistas poco entrenados y en sus dirigentes inexpertos. Entre estos enviados se encontraba Steve Nelson, con el cargo de comisario político. Nelson, nacido en 1901, había recibido entrenamiento de espionaje en Moscú y había asumido el cargo de agente secreto de la Comintern en China, de manera que se le consideraba un comunista acérrimo.<sup>30)</sup> Harry Fisher escribía así la primera impresión de Nelson en el Jarama:

La primera vez que vi a Steve Nelson fue en el Jarama, cuando vino para visitarnos. Estaba acompañado por otro dirigente comunista norteamericano, Harry Haywood<sup>31)</sup>, Nelson vestía un uniforme desaliñado que no le sentaba bien, pero que era el típico “uniforme” de cualquier brigadista. Haywood, por el contrario, vestía un uniforme impecable que se completaba con botones metálicos y unas botas con apariencia de ser muy caras. Sostenía un palo delgado que recordaba una fusta. (...) No hace falta decir que los hombres no quedaron favorablemente impresionados por Harry Haywood. Steve Nelson, por el contrario, fue recibido calurosamente y era obvio que gustó mucho a la gente.<sup>32)</sup>

Kawanari se entrevistó con Nelson en Massachusetts, donde vivía, en septiembre de 1985. En esta ocasión, Nelson le contó un episodio relacionado con el general Gal, comandante húngaro de la XV Brigada Internacional: al ponerse al frente del batallón, Nelson pensó que la permanencia de los brigadistas en el frente ya era demasiado larga, lo cual podría bajar la moral de los soldados. Por eso, solicitó una entrevista con Gal para hablar de este asunto con él. Cuando Nelson entró en el Cuartel General de la XV Brigada Internacional, donde asimismo

se encontraba la vivienda del general, se sorprendió por su suntuosidad. En ese momento, Nelson vestía como un brigadista, como ha señalado Fisher. Parece ser que entre los jefes de las Brigadas Internacionales el lujo no era un detalle inusual. Estos se escudaban en que solo respondía a motivos burocráticos. No obstante, no todo el mundo hacía acopio de una vida lustrosa, ejemplo de ello era la figura de Nelson. Este comisario político era tan modesto que no les seguía la corriente.<sup>33)</sup> En la entrevista con Kawanari, Nelson admitió que Jack Shirai siempre había sido vigoroso y nunca había perdido la sonrisa durante la contienda.<sup>34)</sup> A este respecto, el historiador norteamericano Adam Hochschild detalla en estas líneas la relación entre Nelson y Shirai en el batallón:

Nelson encontró a alguien que podría ayudarlo a elevar la moral de la unidad. Se trataba de Jack Shirai, un cocinero estadounidense de San Francisco<sup>35)</sup> de origen japonés. Shirai y dos compañeros voluntarios a menudo hablaban de abrir juntos un restaurante después de la guerra donde cualquiera que hubiera combatido en España podría comer gratis. Shirai había insistido en que quería luchar de fusilero, pero Nelson lo colocó en la cocina del batallón con la condición de que, en caso de crisis, estaba autorizado a tomar el fusil. Su buen hacer en la cocina hizo que un agradecido soldado lo calificara de “trabajador milagroso”.<sup>36)</sup>

Nelson certifica de esta forma el susodicho testimonio de Harry Fisher y que “dos compañeros voluntarios” de Shirai serían Mel Offsink y Max Krauthamer. Y de la expresión de Nelson, se deduce que la pericia de Shirai como cocinero fue muy valorada y su persona tenida en muy alta estima tanto por Nelson como por otros camaradas en el batallón.

Desde los últimos días de marzo, cuando el frente iba recobrando la tranquilidad, Martin Hourihan empezó a dar a sus brigadistas unos días de descanso en Madrid.<sup>37)</sup> Harry Fisher también pudo tomar tres días de vacaciones en la capital española con sus tres compañeros, Eli Biegelman, Joe Stoneridge y Mark Rauschwald.<sup>38)</sup> Fisher se acordaría de los días en Madrid como sigue:

Era extraño estar en esta gran ciudad y ver la vida discurriendo con más o menos normalidad. El hotel en el que nos hospedamos había recibido impactos de bombas varias veces, pero nosotros nos sentimos seguros y cómodos por primera vez en varias semanas. Teníamos una bañera, un auténtico lavabo y, lo mejor de todo, camas con sábanas.<sup>39)</sup>

Tras casi tres semanas de permanencia en el frente del Jarama, para ellos la estancia en otro lugar debió de ser especialmente confortable, pese a su corta duración. Además, en Madrid los brigadistas podrían disfrutar de actividades recreativas, como la prostitución, aunque la capital española había sufrido graves daños por el ataque nacional durante los meses anteriores. Fisher y sus compañeros durmieron en un prostíbulo en la primera noche de

su estancia.<sup>40)</sup>

En abril, en el Jarama, el frío terrible que había asolado a los brigadistas desapareció y la situación en el frente se sosegó favorablemente con el ambiente primaveral. Por entonces, James Ford, dirigente de los movimientos obreros negros en el Partido Comunista estadounidense, visitó a los brigadistas en el frente.<sup>41)</sup> El partido pretendía aumentar el número de afiliados afroamericanos en Estados Unidos, por lo que Ford, conocido por su actividad, fue enviado a España.<sup>42)</sup> En esta ocasión, Jack Shirai vio a Ford y le saludó dándole la mano.

A últimos de abril, se formó otro batallón norteamericano, el George Washington, con 525 combatientes recién llegados. Este nuevo batallón de la XV Brigada Internacional permaneció, para recibir instrucción, en Tarazona de la Mancha, a unos 32 kilómetros al noroeste de Albacete. El monitor de su entrenamiento fue Allan Johnson, quien había sido mandado a España junto con Steve Nelson por el Partido Comunista estadounidense. Johnson tenía un pasado irreprochable para este cargo, puesto que se había graduado en la academia militar y había tenido experiencia en la Primera Guerra Mundial. El encargo de comandante del batallón lo desempeñaría Mirko Markovic, norteamericano de origen croata, que también había intervenido en la Primera Guerra Mundial. Markovic estaba protegido por Copic, comandante en jefe de la XV Brigada Internacional, debido a su mismo origen croata.<sup>43)</sup>

A mediados de junio, tras el período de entrenamiento, el George Washington se dirigió hacia el frente del Jarama con el fin de reemplazar al Abraham Lincoln.<sup>44)</sup> Entonces, este último ya llevaba casi cuatro meses en el frente y lógicamente todos los soldados querían alejarse de allí. Al final lo consiguieron, pero en unos días se vieron obligados a volver al campo de batalla. En julio, la mayoría de los combatientes del batallón Abraham Lincoln participarían en la batalla de Brunete (6-25 de julio). El combate resultó una auténtica lucha a muerte y fallecieron, resultaron heridos o cayeron prisioneros unos 300 norteamericanos.<sup>45)</sup> Shirai fue uno de ellos. El 11 de julio, en pleno combate en la cercanía del Cerro del Mosquito, una bala enemiga le hirió la cabeza o la cerviz (este dato no ha sido aclarado), a consecuencia de lo cual murió en el acto.

## Conclusión

En la Guerra Civil española, Jack Shirai vivió la parte más emocionante de su vida. Participó como brigadista y cocinero en una de las batallas más duras: la del Jarama en febrero de 1937. Shirai se encargó de la cocina del batallón Abraham Lincoln, lo que suscitó la admiración de sus compañeros. Además, la relación amistosa con sus dos ayudantes de cocina, Mel Offsink y Max Krauthamer, y con otros comandantes y camaradas, como Steve Nelson, Harry Fisher o el Dr. William Pike, le enriqueció personalmente. Por su destreza como cocinero y por su simpatía, Shirai se ganó la confianza de sus compañeros. El reconocimiento de su actividad en España significó una compensación por las dificultades de su vida en Hakodate,



su pueblo natal en Japón y en Nueva York donde había vivido en su juventud.

Por otra parte, la batalla del Jarama, como enfatiza Harry Fisher, evidenció la falta de experiencia militar de los brigadistas estadounidenses. Está claro que muchos de ellos lo pagaron caro al morir en el frente no sólo en la batalla del Jarama sino también en la posterior de Brunete. A los no pocos voluntarios extranjeros que cayeron en el campo de batalla se les dio sepultura en España. Jack Shirai no fue una excepción. Fisher relataría en su libro de memorias que el cadáver de Shirai fue enterrado cerca del Cerro del Mosquito donde se desarrolló la batalla de Brunete con la foto de Sam Walters.<sup>46)</sup> Después de todo, Shirai, el único brigadista japonés que luchó con la República en esta contienda, procedente de Estados Unidos, sigue descansando en la tierra española guardando recuerdos de una vida fugaz, pero llena de acontecimientos.

Al mismo tiempo, la presencia de los brigadistas extranjeros como Shirai en la Guerra Civil española simboliza la fuerza de la ayuda internacional a la República y el fuerte impacto de esta contienda a nivel mundial. A pesar de que la voluntad de los combatientes norteamericanos ejemplificados por Shirai para apoyar a los republicanos era tan vigorosa como valiosa, la contienda española terminó con la derrota de éstos en abril de 1939. Incluso ahora, transcurridos más de ochenta años tras el fin de la Guerra Civil, resulta deplorable que el ímpetu y el esfuerzo de los brigadistas no contribuyeran finalmente a que la República española ganara esta contienda fratricida.

## Notas

- 1) Ishigaki, 1989, p. 12.
- 2) Yasuda, 2012; Yasuda, 2016; Yasuda, 2018.
- 3) Yasuda, 2012.
- 4) Rubio Cabeza, 1987, p. 440.
- 5) Thomas, 2001, p. 637.
- 6) Rubio Cabeza, op. cit., p. 440.
- 7) Kawanari, 1989, p. 108. Este libro fue reimpresso en 2013.
- 8) Ibid., pp. 108-111.
- 9) Ibid., pp. 111, 113.
- 10) Kawanari, 1992, p. 121.
- 11) Vidal, 1998, p. 116.
- 12) Ibid., pp. 116-117.
- 13) Ibid., pp. 118-119; Fisher, 2001, p. 96.
- 14) Fisher, op. cit, p. 83; Kawanari, 1989, p. 113.
- 15) Kawanari, 1989, p. 115.
- 16) Fisher, op. cit., p. 84.
- 17) Kawanari, 1989, pp. 116-117.
- 18) Ibid., pp. 117-118.
- 19) Ibid., p. 118.
- 20) Ibid., pp. 119, 123.
- 21) Ibid., p. 123.

- 22) Ibid., pp. 124-125.
- 23) Fisher, op. cit., p. 87.
- 24) Kawanari, 1989, pp. 125-126.
- 25) Ibid., pp. 126-127.
- 26) Ibid., p. 130.
- 27) Preston, 2000, p. 139.
- 28) Kawanari, 1989, p. 136.
- 29) Ibid., pp. 136-137; Carroll, 1994, p. 105.
- 30) Kawanari, 1989, pp. 147, 164.
- 31) Haywood era comunista afroamericano de 39 años, que desempeñaba el cargo de vicecomisario del Abraham Lincoln. A diferencia de Nelson, Haywood no se atrevió a mezclarse con sus brigadistas. Además, a pesar de haber tenido experiencia militar en la Primera Guerra Mundial, en la batalla de Brunete se negó a luchar en el frente por el tremendo estrés que padecía. Poco después, por recurrir a la bebida para solucionar sus problemas, acabaría alcoholizado y se vería obligado a regresar a Estados Unidos.
- 32) Fisher, op. cit., p. 97.
- 33) En efecto, a Nelson no le gustaba nada la constitución burocrática que se veía con claridad entre los dirigentes comunistas. En 1952, Nelson se separó del Partido Comunista estadounidense harto de eso.
- 34) Kawanari, 1989, pp. 160, 164-165.
- 35) Muchos de los investigadores que se han referido a Shirai han señalado que llegó de San Francisco. Arthur H. Landis, Andreu Castells, Peter N. Carroll y Adam Hochschild lo han escrito en sus obras. You Kawanari, sin embargo, ha dudado de eso y ha enfatizado la posibilidad de que sólo viviera en Nueva York, porque en su indagación no ha encontrado ninguna prueba de que participara en movimientos sindicales en San Francisco. Además, Kawanari preguntó a Al Tanz, uno de los supervivientes a la guerra del batallón Abraham Lincoln y jefe de Shirai en la intendencia, en la entrevista en febrero de 1985 si el japonés había permanecido en la ciudad californiana, pero Tanz no sabía si era verdad o no. Después, Kawanari se disponía a ver a Arthur H. Landis, para cerciorarse de la veracidad de la hipótesis, pero debido a que entonces Landis estaba postrado en cama por una enfermedad, tampoco lo pudo confirmar. Incluso en la actualidad, no se sabe si Shirai permaneció en San Francisco. Teniendo en cuenta lo que Ayako Ishigaki, que le conoció en Nueva York, no ha aludido absolutamente a dicha posibilidad en su obra, la suposición de Kawanari resulta más convincente.
- 36) Hochschild, 2018, pp. 177-178.
- 37) Kawanari, 1989, p. 148.
- 38) Fisher, op. cit., p. 97.
- 39) Ibid., p. 98.
- 40) Loc. cit.
- 41) Kawanari, 1989, p. 152.
- 42) Existe un ejemplo similar al de Ford. Cuando el batallón Abraham Lincoln iba a seleccionar a un nuevo comandante, en vez de Robert Merriman, los dirigentes comunistas propusieron a Oliver Law, un afroamericano perteneciente a la compañía de ametralladoras. El Partido Comunista intentó mejorar su imagen recalcando la integración racial brigadista. Al final, Law asumió el cargo de subcomandante del batallón.
- 43) Kawanari, 1989, pp. 169-170.
- 44) Ibid., pp. 168, 172.
- 45) Hochschild, op. cit., p. 279.
- 46) Fisher, op. cit., p. 127.

## Bibliografía

- CARROLL, Peter N., *The odyssey of the Abraham Lincoln Brigade: Americans in the Spanish Civil War*, California, Stanford University Press, 1994.
- CASTELLS, Andreu, *Las Brigadas Internacionales de la guerra de España*, Barcelona, Ariel, 1974.
- FISHER, Harry, *Camaradas —Relatos de un brigadista en la Guerra Civil española—*, Madrid, Laberinto, 2001.
- HOCHSCHILD, Adam, *España en el corazón: La historia de los brigadistas americanos en la Guerra Civil Española*, Barcelona, Malpaso Ediciones, 2018.
- ISHIGAKI, Ayako, *Spain de tatakatta nihonjin (Un soldado japonés en la Guerra Civil española)*, Tokio, Asahishinbunsha, 1989.
- KAWANARI, You, *Spain sensou —Jack Shirai to kokusairyodan— (La Guerra Civil española —Jack Shirai y las Brigadas Internacionales—)*, Tokio, Asahishinbunsha, 1989.
- , *Spain kokusairyodan no seishun (La flor de las Brigadas Internacionales en la Guerra Civil española)*, Tokio, Fukutakeshoten, 1992.
- LANDIS, Arthur H., *The Abraham Lincoln Brigade*, Nueva York, The Citadel Press, 1968.
- PRESTON, Paul, *La Guerra Civil española*, Barcelona, Plaza & Janés, 2000.
- RUBIO CABEZA, Manuel, *Diccionario de la Guerra Civil española*, 2 tomos, Barcelona, Planeta, 1987.
- THOMAS, Hugh, *La Guerra Civil española*, 2 tomos, Barcelona, Grijalbo Mondadori, 2001.
- VIDAL, César, *Las Brigadas Internacionales*, Madrid, Espasa Calpe, 1998.
- YASUDA, Keishi, “El itinerario de un brigadista japonés-estadounidense: Jack Shirai y la Guerra Civil española (1) —Reflexiones sobre su vivencia en Hakodate y Nueva York—”, *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*, Vol.34, n.º 1, 2012, pp.69-85.
- , “El itinerario de un brigadista japonés-estadounidense: Jack Shirai y la Guerra Civil española. Reflexiones sobre la experiencia como cocinero del batallón Abraham Lincoln”, en GÓMEZ ARAGÓN, Anjhara (ed.), *Japón y “Occidente”. El patrimonio cultural como punto de encuentro*, Sevilla, Aconcagua Libros, 2016, pp.353-362.
- , *El itinerario de un brigadista japonés-estadounidense: Jack Shirai y la guerra civil española*, Beau Bassin, Editorial Académica Española, 2018.

# How to construct generalized logistic curves associated with the complex logistic equation:

An application to COVID-19

Jun Arai<sup>\*</sup>, Yasuyuki Nishigaki<sup>†</sup>, Toshikazu Ito<sup>‡</sup>

▶ キーワード

complex logistic equation  
pole point  
generalized logistic curve  
COVID-19

▼ Summary

This paper, first, reviews the complex logistic equation and its solution. Then, we define the generalized logistic curve and study its properties. Furthermore, we approximate the variation of the number of infected patients of COVID-19 by using the generalized logistic curve.

---

\* Associate Professor, Faculty of Economics, Ryukoku University

† Professor, Faculty of Economics, Ryukoku University

‡ Emeritus Professor, Faculty of Economics, Ryukoku University

## Introduction

In order to study population dynamics, T.R.Malthus introduced the differential equation:

$$(0.1) \quad \frac{dx}{dt} = ax$$

where  $a$  is a positive constant ([2]). Equation (0.1) is known as the Malthus growth equation. Furthermore, P.F.Verhulst modified Equation (0.1) to Equation (0.2):

$$(0.2) \quad \frac{dx}{dt} = ax - bx^2$$

where  $a > 0$  and  $b > 0$  ([3]). Equation (0.2) is known as the logistic equation.

In our previous paper ([1]), we introduced the complex logistic equation:

$$(0.3) \quad \frac{dZ}{dT} = aZ(1-Z)$$

where  $a$ ,  $T$  and  $Z$  are complex numbers, and using the solution of Equation (0.3), we constructed the generalized logistic curve. In this paper, we will express the detailed construction of generalized logistic curves associated with the complex logistic equation. Presumably, using these generalized logistic curves, we can depict the variation of the number of infected patients of COVID-19.

This paper consists of four sections, as follows. The first section reviews the complex logistic equation. The second section constructs generalized logistic curves. The third section illustrates generalized logistic curves. The last section depicts the variation of the number of infected patients of COVID-19 by the generalized logistic curve.

## 1 A review of the complex logistic equation

In this section, we will review the complex logistic equation according to [1].

Let  $a$  be a non-zero complex number. The equation:

$$(1.1) \quad \frac{dZ}{dT} = aZ(1-Z)$$

with the initial condition  $z_0 \neq 0, 1$  has the explicit solution:

$$(1.2) \quad Z(T) = \frac{1}{\frac{1-z_0}{z_0} e^{-aT} + 1}$$

Using the exponential expression  $\frac{1-z_0}{z_0} e^{u_0+v_0\sqrt{-1}}$  and the coordinate transformation of  $\alpha T = U = u + v\sqrt{-1}$ , Equation (1.2) is rewritten by  $U$  as follows:

$$(1.3) \quad \tilde{Z}(U) = \frac{1}{e^{(u_0-u)} \cdot e^{(v_0-v)\sqrt{-1}} + 1}$$

We consider the absolute value squared of  $\tilde{Z}(U)$ :

$$(1.4) \quad |\tilde{Z}(U)|^2 = \frac{1}{e^{2(u_0-u)} + 2e^{(u_0-u)} \cdot \cos(v_0-v) + 1}$$

We envisage that, regarding the two real variables  $u$  and  $v$  in Equation (1.4), the former represents a change of population size and the latter represents an environmental variable such as the change of the seasons, etc.

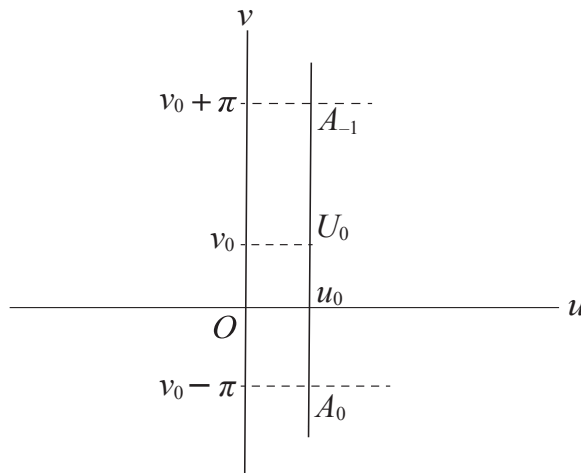
When a point  $U = (u, v)$  in  $\mathbf{R}^2$  moves along the line  $L$ , we define the function  $\varphi(\theta)$  of  $\theta$  as the restriction of  $|\tilde{Z}(U)|^2$  on  $L$ . We call this graph of  $\varphi(\theta)$  the generalized logistic curve.

In the next section, we will give details on the construction of  $\varphi(\theta)$ .

## 2 Construction of $\varphi(\theta)$

Let  $U$  be a point on the plane  $\mathbf{R}^2$ .  $U$  is represented  $(u, v)$  by the coordinate of  $\mathbf{R}^2$ . Take the point  $U_0 = (u_0, v_0) \in \mathbf{R}^2$ . We denote by  $A$  the set of pole points of  $\tilde{Z}(U)$  which is defined by

$$(2.1) \quad \begin{aligned} A &= \{ u_0 - u = 0 \text{ and } v_0 - v = \pi + 2\pi k \mid k \in \mathbf{Z} \} \\ &= \{ A_k = (u_0, v_0 - \pi - 2\pi k) \mid k \in \mathbf{Z} \} \end{aligned}$$



**Fig 2.1:**  $U$ -Plane  $((u, v)$ -plane)



We note that following properties are clear:

Periodic property:  $\tilde{Z}(u, v + 2\pi) = \tilde{Z}(u, v)$

Symmetric property:  $\tilde{Z}(u, v_0 + v) = \tilde{Z}(u, v_0 - v)$ .

We denote by  $\vec{g}_\lambda = \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}} (1, \lambda)$  a gradient vector where  $\lambda$  is a real number. Then we define the line  $L(\lambda, \zeta)$  with the gradient vector  $\vec{g}_\lambda$  and the initial point  $(u_0, v_0 + \zeta)$  as follows:

(2.2)  $L(\lambda, \zeta): U = \theta \cdot \vec{g}_\lambda + (u_0, v_0 + \zeta)$

where  $\theta$  and  $\zeta$  are real numbers.

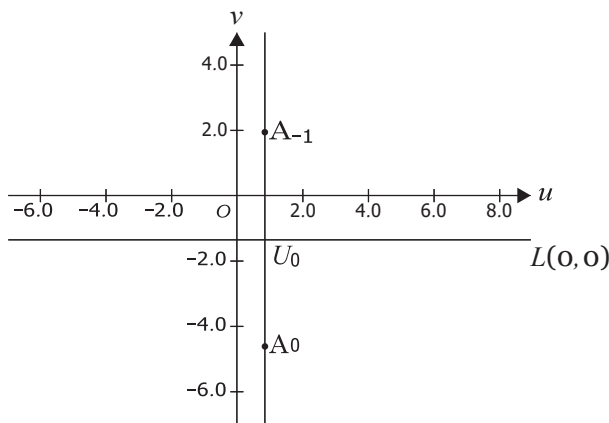
We denote by  $\varphi_{\lambda,\zeta}(\theta)$  the restriction of  $|\tilde{Z}(U)|^2$  on  $L(\lambda, \zeta)$ :

(2.3) 
$$\varphi_{\lambda,\zeta}(\theta) = \frac{1}{e^{-2\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} + 2e^{-\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} \cos(\theta \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}} + \zeta) + 1}$$

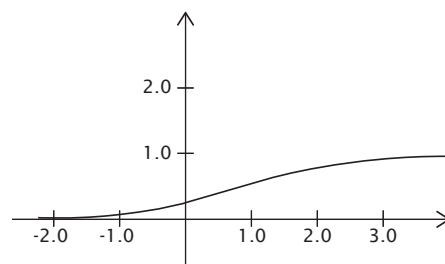
Now, to understand the function  $\varphi_{\lambda,\zeta}(\theta)$ , we give the well-known example, that is, it is known as the logistic curve in the sense of Verhulst.

**Example 2.1** If  $\alpha$  is equal to  $1.0 + 0.5\sqrt{-1}$  and  $z_0 = 0.2 + 0.3\sqrt{-1}$ , we obtain  $U_0 = (u_0, v_0) = (0.86, -1.34)$  by using  $\frac{1-z_0}{z_0} = e^{u_0+v_0\sqrt{-1}}$ . Let  $\lambda$  and  $\zeta$  be zero. Then we have

(2.4) 
$$\varphi_{0,0}(\theta) = \frac{1}{(e^{-\theta} + 1)^2}$$



**Fig 2.2:** The line  $L(0, 0)$



**Fig 2.3:** The generalized logistic curve on  $L(0, 0)$

### 3 Graphs of $\varphi_{\lambda,\zeta}(\theta)$

In this section, we fix  $\alpha = 1.0 + 0.5\sqrt{-1}$  and  $z_0 = 0.2 + 0.3\sqrt{-1}$ . Then we get  $U_0 = (0.86, -1.34)$ . If we give  $\lambda$  and  $\zeta$ , we remember the line  $L(\lambda, \zeta)$ :

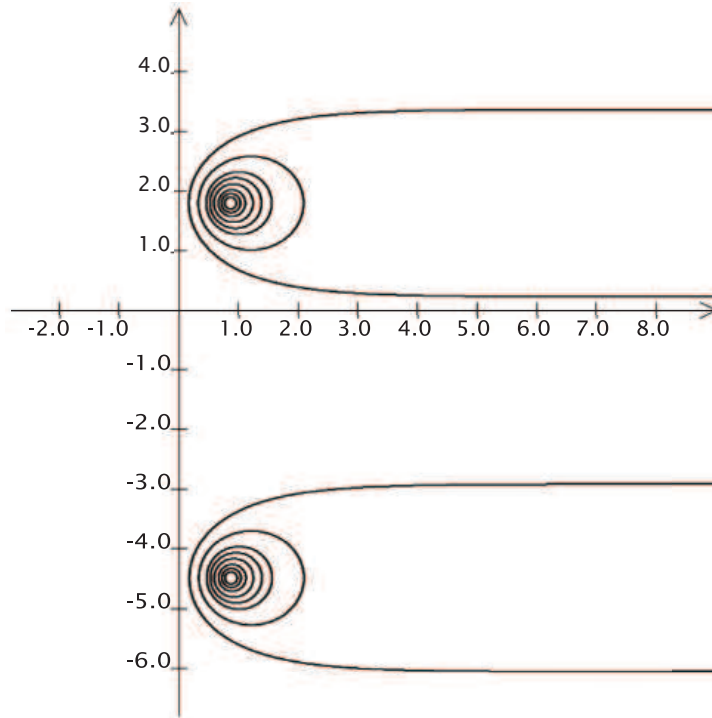
$$(3.1) \quad U = \theta \cdot \vec{g}_\lambda + U_0 + (0, \zeta)$$

and the function  $\varphi_{\lambda, \zeta}(\theta)$  on  $L(\lambda, \zeta)$ :

$$(3.2) \quad \varphi_{\lambda, \zeta}(\theta) = \frac{1}{e^{-2\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} + 2e^{-\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} \cos\left(\theta \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}} + \zeta\right) + 1}$$

### 3.1 the level curves of $|\tilde{Z}(U)|^2$

To investigate the graph of  $\varphi_{\lambda, \zeta}(\theta)$ , we show the level curves of  $|\tilde{Z}(U)|^2$  on  $\mathbf{R}^2$



**Fig 3.1:** Level curves of  $|\tilde{Z}(U)|^2$

### 3.2 A special case of $\lambda = 0$

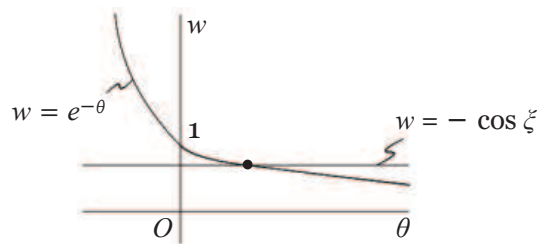
In order to look for local maximal or minimal points of  $\varphi_{0, \zeta}(\theta)$ , we begin to calculate directly on the first derived function of  $\varphi_{0, \zeta}(\theta)$

$$(3.3) \quad \frac{d\varphi_{0, \zeta}(\theta)}{d\theta} = \frac{2e^{-\theta}(e^{-\theta} + \cos \zeta)}{(e^{-2\theta} + 2e^{-\theta} \cos \zeta + 1)^2}$$

The solution of the equation  $\frac{d\varphi_{0,\zeta}(\theta)}{d\theta} = 0$ , that is,  $e^{-\theta} = -\cos \zeta$  is local maximal or minimal points of  $\varphi_{0,\zeta}(\theta)$ .

### Summary of a special case

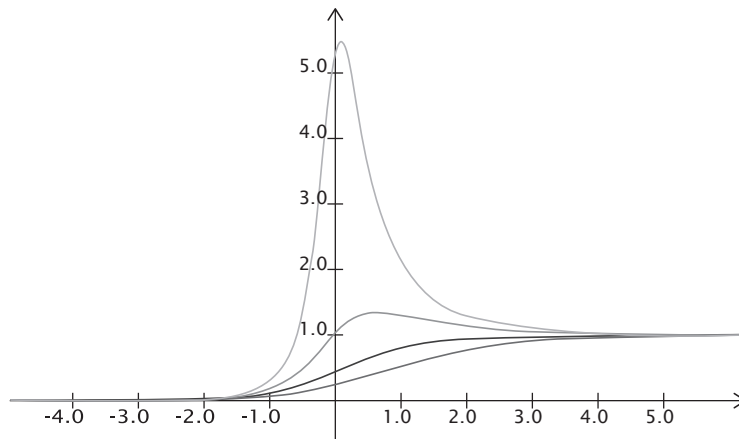
- (1) When  $\zeta$  is  $0 \leq \zeta \leq \frac{\pi}{2}$ ,  $\varphi_{0,\zeta}(\theta)$  is the increase function such that  $\lim_{\theta \rightarrow +\infty} \varphi_{0,\zeta}(\theta) = 1$  and  $\lim_{\theta \rightarrow -\infty} \varphi_{0,\zeta}(\theta) = 0$ .
- (2) When  $\zeta$  is  $\frac{\pi}{2} < \zeta < \pi$ ,  $\varphi_{0,\zeta}(\theta)$  has one maximal point and two points of inflection such that  $\lim_{\theta \rightarrow +\infty} \varphi_{0,\zeta}(\theta) = 1$  and  $\lim_{\theta \rightarrow -\infty} \varphi_{0,\zeta}(\theta) = 0$ .



**Fig 3.2:** look for local maximal or minimal points of  $\varphi_{0,\zeta}(\theta)$

Moreover, we denote by  $\theta(\zeta)$  the point of the  $\theta$ -axis which attains the maximal value of  $\varphi_{0,\zeta}(\theta)$ . Then we get an inequation:

$$(3.4) \quad \theta(\bar{\zeta}) > \theta(\underline{\zeta}) \quad \text{if } \bar{\zeta} < \underline{\zeta}$$



**Fig 3.3:** Some curves of  $\varphi_{0,\zeta}(\theta)$  ( $\zeta$  is respectively 0, 1.4, 2.1, 2.7)

### 3.3 Another special case of $\zeta = 0$

We also calculate on the first derived function of  $\varphi_{\lambda,0}(\theta)$ :

$$(3.5) \quad \frac{d\varphi_{\lambda,0}(\theta)}{d\theta} = \frac{2e^{-\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} \left\{ \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}} e^{-\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} + \cos\left(\theta \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}} - \zeta\right) \right\}}{\left\{ e^{-2\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} + 2e^{-\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} \cos\left(\theta \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}}\right) + 1 \right\}^2}$$

where  $\zeta$  is defined by  $\cos \zeta = \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}$  and  $\sin \zeta = \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}}$

Since we cannot solve explicitly the equation:

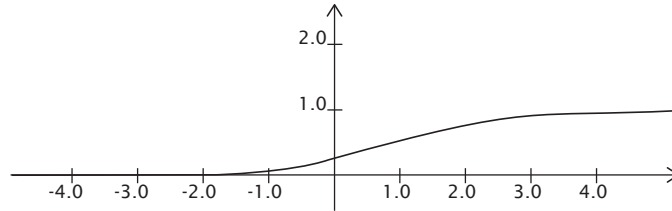
$$(3.6) \quad \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}} e^{-\theta \frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}}} = -\cos\left(\theta \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}} - \zeta\right)$$

We try to investigate solutions of Equation (3.6) by computer approximation.

(i) When  $\lambda$  is sufficiently small, we may expect  $\frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}} \doteq 1$ ,  $\frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}} \doteq 0$  and  $\zeta \doteq 0$

If  $\theta$  satisfies  $\theta \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}} < \frac{\pi}{2}$  i.e.  $\theta < \frac{\sqrt{1+\lambda^2}}{\lambda} \cdot \frac{\pi}{2}$ , then the equation

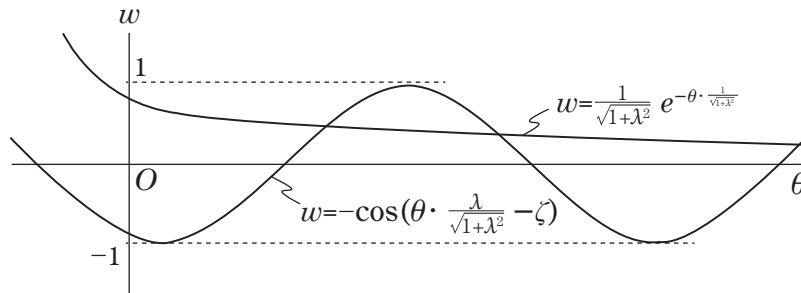
$e^{-\theta} = -\cos\left(\theta \frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}}\right)$  has no solution.



**Fig 3.4:** graph of  $\varphi_{0,1,0}(\theta)$

We note that the two conditions:  $\theta < \frac{\sqrt{1+\lambda^2}}{\lambda} \cdot \frac{\pi}{2}$  and  $\lambda$  is sufficiently small, mean that  $\theta$  reaches a sufficiently large number.

(ii) When  $\lambda$  is sufficiently large, we may expect  $\frac{1}{\sqrt{1+\lambda^2}} \doteq 0$ ,  $\frac{\lambda}{\sqrt{1+\lambda^2}} \doteq 1$  and  $\zeta \doteq \frac{\pi}{2}$ .

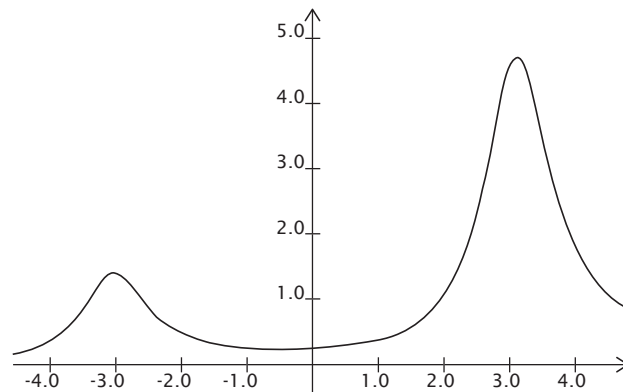


**Fig 3.5:** to solve Equation (3.6).

Since Equation (3.6) is  $0 \cdot e^{-\theta \cdot 0} = 0 \doteq -\cos\left(\theta - \frac{\pi}{2}\right)$ , we get the infinite solutions

$\theta \doteq \pi, 2\pi, 3\pi, \dots$ . (See Fig 3.7)

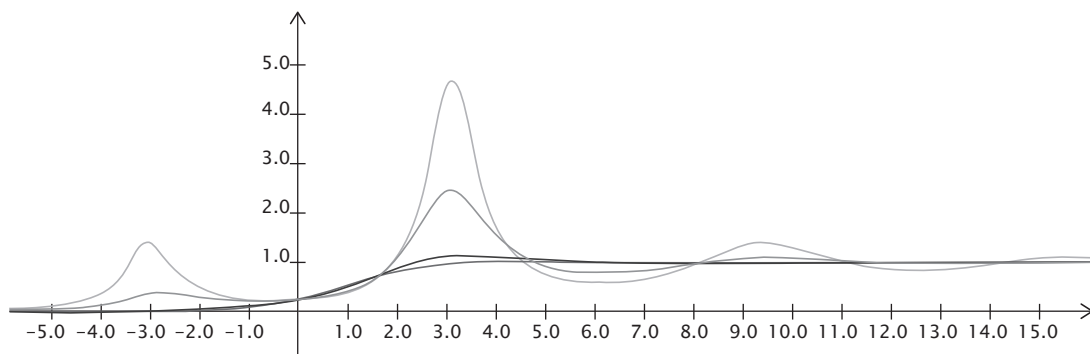
Moreover, we remark that  $\theta$  attains its local maximal points and minimal ones alternately.



**Fig 3.6:** graph of  $\varphi_{5,0}(\theta)$

### Summary of another special case

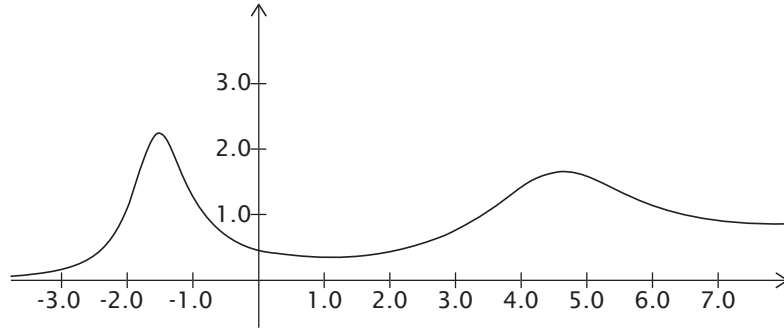
- (1) If  $\lambda$  is sufficiently small,  $\varphi_{\lambda,0}(\theta)$  is the increase function such that  $\lim_{\theta \rightarrow +\infty} \varphi_{\lambda,0}(\theta) = 1$  and  $\lim_{\theta \rightarrow -\infty} \varphi_{\lambda,0}(\theta) = 0$ . (See Fig 3.4)
- (2) There exist  $\lambda$  such that  $\varphi_{\lambda,0}(\theta)$  has many maximal and minimal points. (See Fig 3.5, Fig 3.6)



**Fig 3.7:** Some curves of  $\varphi_{\lambda,0}(\theta)$  ( $\lambda$  is respectively 0.5, 1, 3, 5)

### 3.4 A generic case (i.e. $\lambda \neq 0$ and $\zeta \neq 0$ )

As a generic case, let  $\lambda = 3.0$  and  $\zeta = 2.5$ . (See Fig 3.8)



**Fig 3.8:** graph of  $\varphi_{3,2.5}(\theta)$

## 4 Application to COVID-19

In accordance with the global spread of new-type coronavirus infections (COVID-19), WHO and health authorities in each country predicted the epidemic, and its application to infectious disease control has attracted great attention. Although the SEIR model, which is one of the typical predictive models, is based on a system of simple differential equations ( $\frac{dx}{dt} = ax$ , or  $\frac{dx}{dt} = ax(1-x)$  originated in the population dynamics by [2] and [3]), it has had considerable success in predicting the spread and end of the epidemic according to whether the prevention measures are adequate or not.

In the previous sections, we investigated properties of the generalized logistic curves  $\varphi(\theta)$ . Using these generalized logistic curves, we will, in this section, predict the variation of the number of new COVID-19 infections in Japan.

In order to approximate to the curve of Fig 4.1, we have the following three steps.

Step1: We envisage level curves of  $|\tilde{Z}(U)|^2$  on  $\mathbf{R}^2$  (See Fig 3.1) and generalized logistic curves (See Fig 3.3, Fig 3.4, Fig 3.6, Fig 3.8) Especially, we give attention to pole points (See Fig 2.1).

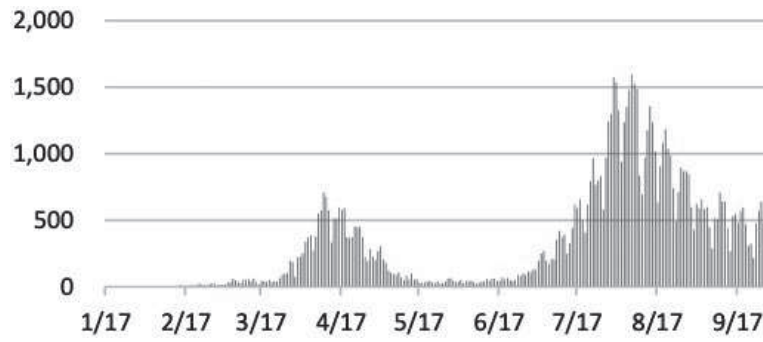
Step2: We will try to choose a line segment several times. Moreover, we illustrate the generalized logistic curve  $\varphi(\theta)$  which is defined by the restriction  $|\tilde{Z}(U)|^2$  on the line segment.

Step3: Comparing these generalized logistic curves with the curve of Fig 4.1, we can fix one generalized logistic curve.

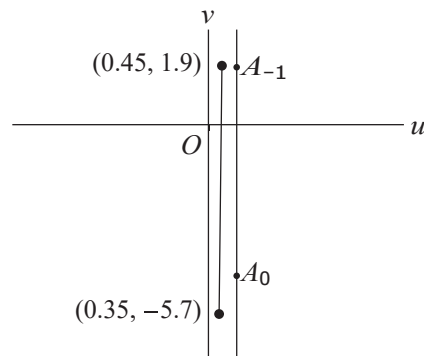
**Example 4.1** *Fig 4.1 is the data of the variation of the number of new COVID-19 infections in Japan.*

We approximate Fig 4.1 by the generalized logistic curve  $\varphi(\theta)$ , (See Fig 4.2 and Fig 4.3.)

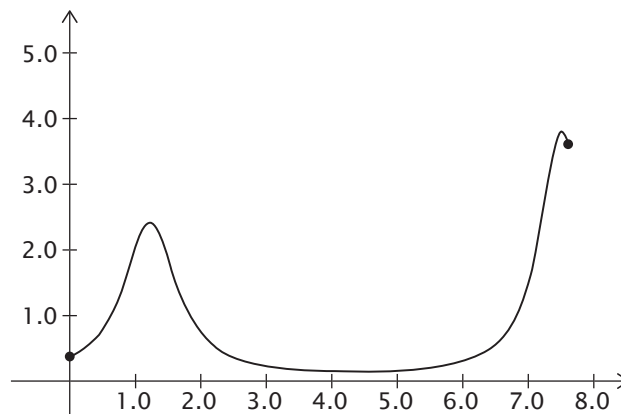




**Fig 4.1:** New COVID-19 infections in Japan (Ministry of Health Labour and Welfare)

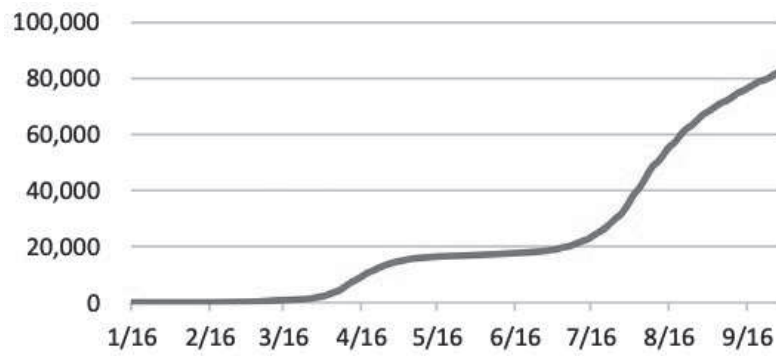


**Fig 4.2:** The line segment for new infections in Japan



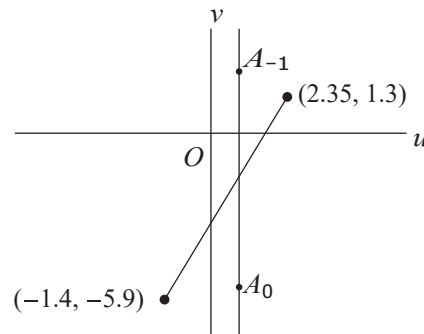
**Fig 4.3:** Generalized logistic curve for new infections in Japan

**Example 4.2** *Fig 4.4 is the data of the variation of the cumulative number of COVID-19 infections in Japan.*

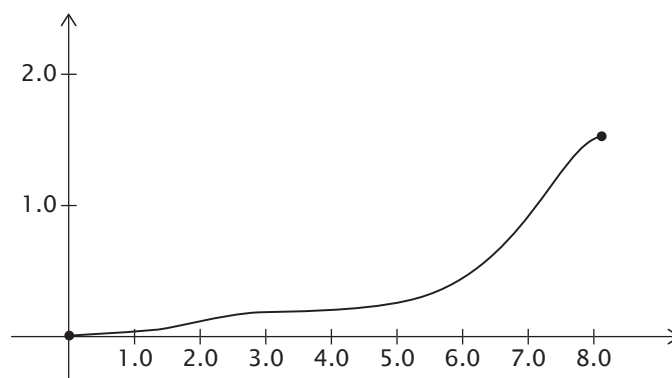


**Fig 4.4:** the cumulative number of COVID-19 infections in Japan (Ministry of Health Labour and Welfare)

We approximate Fig 4.4 by the generalized logistic curve  $\varphi(\theta)$ , (See Fig 4.5 and Fig 4.6.)

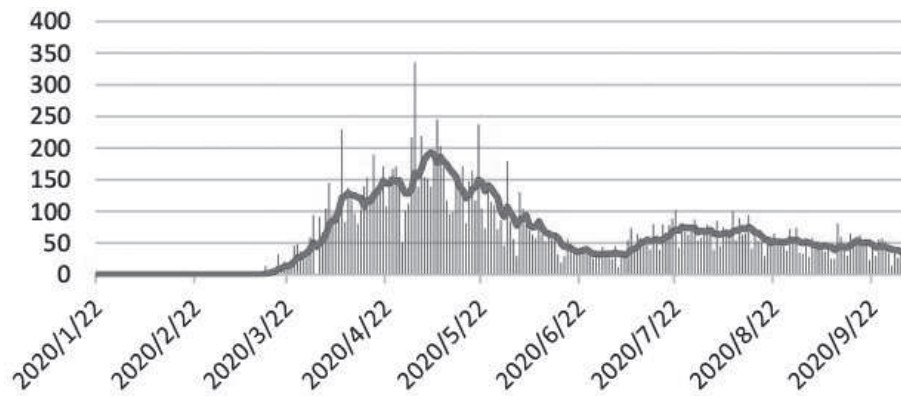


**Fig 4.5:** The line segment for the cumulative number of infections in Japan



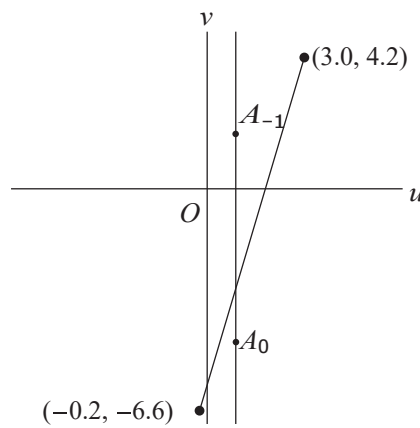
**Fig 4.6:** generalized logistic curve for the cumulative number of infections in Japan

**Example 4.3** Fig 4.7 is the data of the variation of the number of new COVID-19 infections in the District of Columbia.

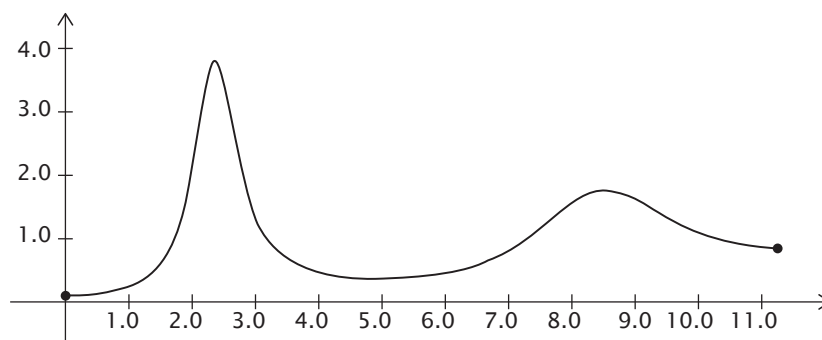


**Fig 4.7:** Daily Trends in Number of COVID-19 Cases in the District of Columbia Reported to CDC

We approximate Fig 4.7 by the generalized logistic curve  $\varphi(\theta)$ , (See Fig 4.8 and Fig 4.9.)



**Fig 4.8:** The line segment for new infections in the District of Columbia



**Fig 4.9:** generalized logistic curve for new infections in the District of Columbia

## Conclusion

We introduced the generalized logistic curve associated with the complex logistic equation.

We discovered many different properties of  $\varphi_{\lambda, \zeta}(\theta)$ . Using these properties, we could depict variations of the number of COVID-19 infections.

## Acknowledgement

We would like to thank Yasuhiro Sakai for helpful comments. We also would like to thank the research fund designated by the Institute of Social Science, Ryukoku University.

## References

- [1] J. Arai, Y. Nishigaki, H. Terada, and T. Ito. Properties of a complex logistic equation and its application to economic dynamics. *The Journal of Economics (Chuo University)*, 65(5): 1–18, 2021.
- [2] T.R. Malthus. *An essay on the principle of population, as it affects the future improvement of Society with remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers*. J. Johnson, in St. Paul's Churchyard, London, 1798.
- [3] P.F. Verhulst. *Notice sur la loi que la population poursuit dans son accroissement*, volume 10, pages 113–121. *Correspondances Mathématiques et Physiques*, 1838.

## 執筆者紹介

角岡賢一	本学経営学部教授(英語)
Simon ROSATI	本学経済学部教授(英語)
今井敦	本学経済学部教授(ドイツ語)
安田圭史	本学経済学部准教授(スペイン語)
新井潤	本学経済学部准教授(情報科学入門)
西垣泰幸	本学経済学部教授(経済学)
伊藤敏一	本学経済学部名誉教授(数学)

## 編 集 後 記

『龍谷紀要』第43号第1号をお届けいたします。本号では、英語分野から2編、初修外国語分野から2編、自然科学分野から1編の計5編の投稿がありました。ご味読ください。COVID-19の影響で物理的・心理的負担が著しい中、玉稿をお寄せいただいた先生方、さらに原稿点検の労をお取りいただいた先生方に、この場を借りまして、心より感謝申し上げます。

オンライン授業やテレワークを実施するにあたって、これまでただ漫然とこなしていたことの中で、何が大事で、何を守らなければならないのかということが、図らずも浮き彫りにされたように思います。新しいことを学ぶこと、見つけることはやはり楽しいことであり、自らの発見したことを他者に知ってもらうことは、さらに楽しいことです。COVID-19が猛威をふるう中でも力作が寄せられ、刊行にあたって多くの方のご協力を得られたということによって、そうした楽しさが大学の教育研究活動の根幹であること、また、研究発表の場がいかに大事であり、守るべきものであるのかということ、改めて痛感させられました。

コロナ禍以前より研究者を取り巻く環境は厳しくなる一方でしたが、COVID-19はそれに拍車をかけ、研究・教育・大学諸業務に変化が強いられています。そうした中で、この貴重な研究発表の場を守っていくためには、今後もたくさんのご投稿とご協力が不可欠です。引き続き、『龍谷紀要』にご高配を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(手嶋 泰伸)

## 編 集 委 員

手 嶋 泰 伸    打 本 弘 祐    谷      綾 子  
許      秀 美    新 井      潤    長 谷 川      裕

2021年11月12日    印 刷  
2021年11月19日    発 行

龍谷紀要第43巻 第1号

編 集    龍 谷 大 学  
龍谷紀要編集委員会

発 行    龍 谷 大 学  
京都市伏見区深草塚本町67  
電 話 (075) 642-1111

印 刷 所    株式会社 きょうせい